

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

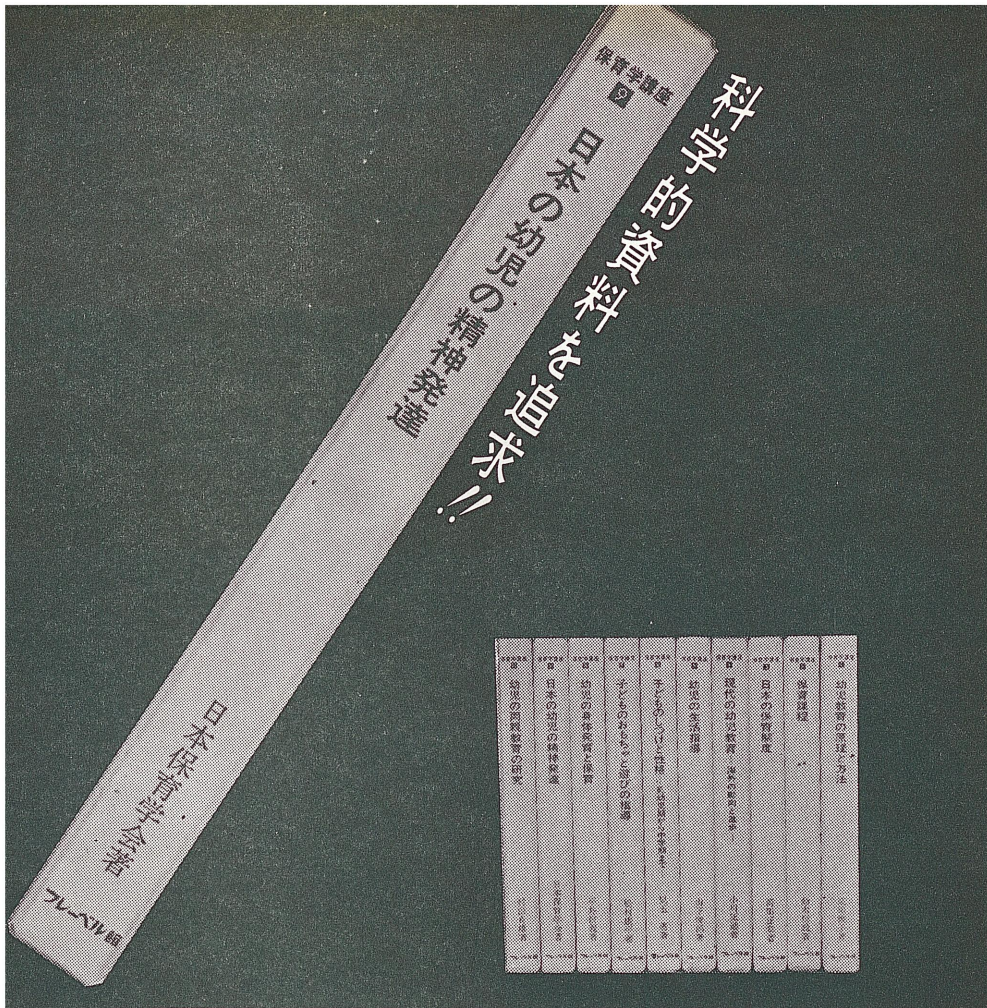
第七十卷 第二号

46. 2. 3



2

日本幼稚園協会



日本保育学会発足20周年記念出版

日本保育学会監修

保育学講座 全10巻

第10回配本／第9巻・日本の幼児の精神発達……………日本保育学会著

(保育学講座)は、保育の原点をさぐるユニークな全集としてますます好評を博しております。

特に9巻は、全国7,320名の幼児を選んで運動的発達、知的発達、情緒的発達、社会的発達の4面から調整し、15年前の同調査と比較することによって現代の幼児の精神的発達の実態を明らかにしています。最近話題になっている幼児教育のあり方を考える上にぜひとも必要な科学的資料を提供するわが国唯一の本です。

A5判・上製本ケースつき 定価・各巻1,200円

発行・株式会社 **フレール館**

幼児の教育

第七十卷 第二号





幼児の教育 目次

第七十卷 二月号

表紙 小野木 学
カッタ 斎藤 信也

講演

詩のころろ……………吉田一穂(4)

遊べない子と現代の幼稚園

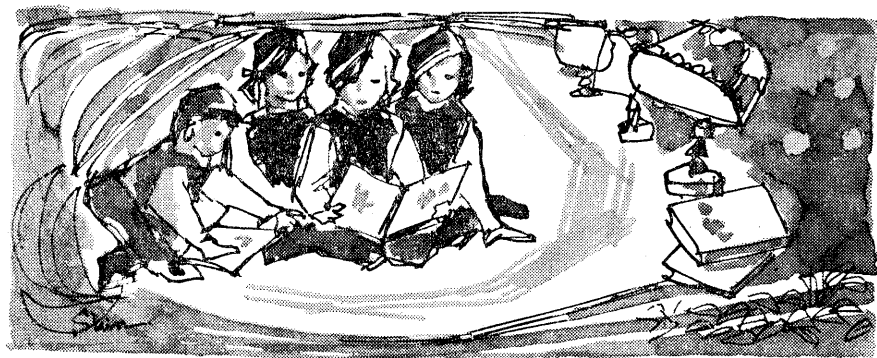
(2) 遊びをつくろう……………有木昭久(25)

伝統的なあそび

★八戸市における子どもあそびとその変容……………中谷喜久子(34)

★伝統的なあそびの行事など

幼稚園生活の中の問題点……………幸田素子(45)



行為をのばす集団活動

肢体不自由児の保育のために……

武藤安子……(53)

★ユートピア……

本田和子……(58)

人——フランスス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界(2)……

秋山達子……(60)

ヨーロッパの旅(十)……

平井信義……(66)

寒風……

倉橋惣三選集より……(71)

編集委員・周郷 博・守永英子
本田和子・鈴木直美
編集主任・津守 真・寺井直子

◇講演◇

詩のこころ

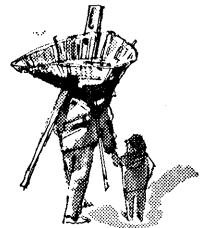
◇詩とこころはおなじ

私の与えられた題は、「詩のこころ」という題ですが、詩は志なりと支那ではいわれ、詩という言葉も、こころという言葉もほとんど同じだと思います。だから結局、詩のこころというものは詩となる志向が現われてきて、表現となる客体性についていわれる、ということだろうと思います。ですから私は主として詩のこころについてだけ、だけというとおかしいが詩のことをしゃべりま

す。
詩といいますが、今、われわれがやっているのは近代詩の中の現代詩だそうです。ところがこんな分類のしかたはおかしいのです。詩には、いろいろなジャンルというか、いろいろな種類があります。その主義主張をいうようなものもあるけれども、皆さんが大体みられるとおりの雑然たるものです。これをひっくるめ

吉田 穂

いつ



て近代詩——あるいは現代詩、若い人は現代詩といっています、私などそういう分類は無意味だと思います。

しかし時代というものはやはり明らかに変わっているのですから、その時代的な意味もございます。それで今これから実際にあなた方が詩とっておられるもの、そういうことについてお話しようと思います。それについてはやはり詩の歴史になります。

◇現代詩の歴史

この歴史というものは、わずか半世紀、否、一世紀ぐらいのものですね、この現代が詩と称しているものは。それ以前は日本では漢詩に対する和歌というものがあつた。和歌というのは要するに支那の漢詩になつた詩ということ、日本の詩ということであつたのです。

しかし、そういう和歌とは、今の詩は違います。和歌というの

は「うた」つまり支那の「漢詩」に対する「日本の詩」ということであり「和・歌」と言った。それからもう一つ「俳句」というものがありますね。これがまあ大きくいえば日本の代表的な詩なのです。これを詩歌とか何とかいいまされども、詩なんぞ世界的に見たって詩なのです。

そこへもってきて何もなかった日本に現代詩という不思議な詩が現われてきた。これは現われ方はいろいろあり、出て来た発生のしかたはたくさんありますが、厳然たる西洋的な詩学——詩の学問——を基礎にしたものです。

和歌や俳句などという科学で、つまり日本の詩の学でできたものは発生したものではない、というのは考え方が違う。つまり西洋詩学であり、まあ、日本のものは日本科学である。そういうものが詩の根本的な観念の相違になってくるわけです。それで、これは今ではもうはっきり分類されておりますけれども、昔は和洋混合していた。

◇日本の基礎的音韻と音律

例えば、はっきりしていることは藤村の詩、そういうものが出てきた時、藤村のは五七調ですね、あるいは七五調、これは日本の音韻・音律の基礎的なものであった。

日本になぜそういう五七調というものが出たかというところ、これは日本語からくる関係です。日本語でこれをやるとすべて五七調

になるといのは、すでに短歌がやっておった。しかし短歌というものは三十一文字ですが、節をわけていくと五七調みたいなものが基礎になっているのです。

俳句もそうです。日本の音律というものは西洋の音律と根本的に違うのだ。そこに日本語の相違がある。独得なつまり音韻があるわけですから西洋の音韻ではないわけですね。

どういふところに違いがあるかというところ、音韻語のようにアクセントがない。第一に、あるいは支那の漢語と比べましても、一字一音というようにいいますけれども支那では四声の別ありでアクセントの置き方によって一つの文字でも全然違った平仄がでてくる。だからそのアクセントの置き方なんていうようなことになって来ると、もちろん日本にも多少ありますけれどもほとんど数で考えていく。音の数が基礎になっている。

日本語と日本の音楽をよくみると、つまり、「歌楽」をみると良くわかる。これは三味線音楽です。メロディーが主のもので、西洋とか支那のように、パンパンピンピンというようにはねる音がない。それをもってアクセントについて音韻を基礎づけていくといったようなことはない。

西洋の音楽の基礎というものはご承知の通り、ハーモニーとメロディーとリズムとこの三つなのです。

だが日本の音楽は三味線音楽ですから、初めから終わりまでメロディー……だから「千鳥の曲」を聞きますね、琴の。僕は葬式

の歌かと思つたのです。そうしたらあれは祝典の音楽なのです。どうもそういうところがありまして、日本の言葉の組織からくるものと音楽も一致している。これはどうしても隠すことができない。

単独に日本の詩歌というものを音韻からいいますれば、どうしても五七調などというものが一番日本人に適應した階音を作つていくわけ、調子を作つていくものである。

で、日本ではいろいろとこの日本音韻の学問をした人がたくさんあるのです。要するに音数が基礎になつてゐる。音数の組合わせによつて五七調になるとか七五調になるとかする。それが長年の間のプロソディー（韻律学）であつたのだな。

そのほかに「間」ですね。メリ・ハリというものがあるでしょう。それが例えばね、ヨツヤという三つの音と、シナノマチという五つの音と同じ時間に発声する。そうすると長いものは速度をあげ短いものはずつとのばす。

「ヨツヤ」「シナノマチ」とくる。そうしてまあ一つの音節にしてしまふ。

こういうところに日本語の不思議な、つまり手をひらいたり、ちぢめたりするような音韻、これを僕は、時律、時の律といふのです。こういう時律があるということを日本ではなかなか気がつかなくなつた。

もう一つ、歌というものはどうしてできるかというところ、日本語

は子音はほとんど一つの独立した単位にならない。しゃべる時ですよ。母音が皆うしろにつく。一つの歌というようなものは、母音または子音に含まれるしりの音を引きのばす。ずうつとのばしていくと歌になるのです。日本の歌の秘密なんてごく簡単なものですよ、小唄だって何だつて良い。唱歌でも何でもそうです。それが何か音楽的なものを持つてくる。こういう変わった不思議なことがある。それが詩歌となつてくるとやはり音韻が基礎になつてゐた。ところが白秋なんかが実はそれを使つた。

◇散文と詩—眞の文学性とは何か—

ところが現代では、この音律というものを意識的に排除するようになった。これはなかなかおもしろく、当然のことですが、現代詩が現代人だといつてやつてゐる。みな散文みたいになつてしまつた。ところが散文でもない。散文で詩を書くなんていう人間がいたら、これは少しうぬぼれてゐる。詩はあくまで詩で書かねばならない。散文で書いてはいけない。

『散文と詩とは絶対に違ふものである』

それが現在の詩をみると何のことはない日記みたいなもの、手紙みたいなもの、それからはなはだしくは小学校の生徒たちが良く書きますね、作文のようなものがあります。それは口語で書く。口語で書けば散文で書いた方が自分の思つてゐることが何でも書ける。なんでも思うことが書けるといふ考え方は注意すべき

だ。そういう関係からだろうと思いますが、そのために本当の意味の詩というものはなくなつた。消されてくる。これは詩のみならず小説だって何だつてそうです。本当の文学なんていうもの、つまり文学性がなくなつてしまふ。

その文学性とは何か、ということがきょうの主題なのですが、皆、週刊雑誌みたいなものが文学だとか、探偵小説のようなものが文学だということになりますとね、ちょっと詩歌なんていうものはいらなくなつてしまふ。

◇うた、ころ

ところがやはり、皆、歌が欲しいし、やりたい。つまり、うた、ころがあるわけだな。かすかに残っているわけだ。それをはっきりさせなくてはいけない。うた、ころとは何だろう。

これは人と人との間によび起こす一つのハーモニーを作るとか、いろいろな感情を融和させるとか、のぼすとか、そういうことが、うた、ころの最初の階梯なんだろうと思えますけれども、そんなものになるのですね。それは、皆、言語からくることでありまして、日本の言語がはっきりしなくては、どうにも音楽も詩も乱れてくる。

しからば日本の言語とは何かというとこれは大変な問題になつてくるな。そして日本の言語はどこからきたかということまでを探し出してくる。似たようなものはありますが、これはどう探し

たつて日本の言語のような言語はない。チベットに日本語のようなものがあるなんていうことになりまして—それはあるかも知れないが—いろいろな言語学者が母音調和の方法だとか何とかいつて、それにそぐわないものは日本語としてどうだとか、いろいろなことをやっています。

これは大変良いことだと思えます。まあ、現在のように文部省で漢字制限だとか新かなづかいだとかいつているが、歴史というものがあるのだから、その歴史によって育つてきたところの日本の言語の基本というものは定まっている。だからこれは歴史的かなづかいだからといって、それをばかにしてはいけない。なぜそういう歴史的かなづかいが成立してきたか。

私はいま七十二歳ですが、最初に国定教科書ができた年に小学校の一年生へ入った。田舎ですからそれはもう教科書どおりやるほかないのですが、それでずっと育つてきたのですな。ところが、それが新かなづかいとか漢字制限だとかになりますとね、どうもわずかしかないのですね、漢字が。漢字だってわれわれのもう記号になつてきているわけですから、随分使えるわけ。ちょっとした教え方で皆良く覚える。実験した人がありますね、非常に漢字の方が覚える。それは覚えるものですよ、漢字なんていうものは……。いわんや字でも、もうちゃんと熟しているものを読む音ができていますから。

どうも言語に関するかぎりは役所が手出ししない方が良いと思

う。そればかりでない、芸術に關しては役所が手出ししちやいか
んと思う。いまに十年も経つとそれは誤りだったと、今までの法
令は皆無駄になりますよ。

いいですか、もとにかえってくる。言語というものは民族の自
然性がありますから。そうそうに民族が二千年ももってきた言語
なんていうものは、こわれるようなものではない。ところが現在
はメチャクチャになっている、というのはただの現象だ。ただ
し、もう少したつと落ちつきますよ。

◇時代の乱れと知識の必要

日本の言語だけでなく、その言語の乱れによって今の時代がど
れだけ悪くなっていることか。第一百姓が仕事をしなくなつたじ
やありませんか。草も刈らずに農葉まいて遊んでばかりいるじゃ
ありませんか。そんな農夫・農家というものがあるのですか。

魚をとらない漁師がないように、そのあとの時間は何している
かという遊ぶことばかり考えている。だから、今、日本は遊ぶ
商売屋が氾濫してますよ。悪い奴は遊ぶ金を作るために悪いこと
をする。そんなつまらない暇があるなら学問でもするかという
と、何もしやしない。

それからやはり小学校の生徒からざっと見て、昔は中学を五年
で卒業したが中学の五年というものは大変なものだった。一人前
に世の中で通用したものです。

今は君どうですか。義務教育、つまり教育というものは、どん
な若い、小さい子ともさんでも、われわれは教育を受ける権利があ
る、そういう気持になつたらどうだろう。これは僕は、明治天皇の
明治憲法のドクトリンだと思ふ。なんでもかんでも義務だ、義務
だという。逆にどうですか、われわれは納税の権利があるといつ
たら、違いますよ、教育を受ける権利がある。ものを教えないな
んで法律がありますか。生まれてきたからにはものを、知識を得
る権利がある。「教育を受ける権利があるのだ」とこういうと日
本の言語は少し覇気を帯びてきますよ。

何でもそうだが、ある面であまり権利がありすぎて。学生が
多くなり勉強しない者もいる。われわれは反抗する権利がある、
なんていうが、反抗は別だ。内容が伴っていない。ゲバ棒持つ権
利がある、などということをいうが、それは強盗に権利があると
いうのと同じですね。つまりその裏には暴力があるからいかに。
暴力は動物の考え方、発想です。

人間は知性的な人間でなければ人間ではない。だから知識はい
くらあつたつて良い。いくらでも磨かなければならない。勉強す
ればするほど楽しくなる。そして女性も美しくなる。それを強制
されて何だかんだいっているのでは、学問をしても何も出てこな
い。われわれはものを知る権利があるのだから、ものを知り知識
をどんどん貯わえていくのはそれは義務かも知らん。

アダムとイブはものを知つたばかりにそれが第一の不幸だと

いうが、決してそんなことはない。喜ばしき知識ということが人間を動かす最大のものである。どんな幸福より知識が喜ばしいということとは最高のことですね。

だから今のように代議士制度になり、平民主義・民主主義になりましたね。これはものを平和にすることですね。一つの水平運動ですよ。だから下にさがるということかな、これを上にあげて次元を高めるといふ努力はない。その次元がわからない。皆、ある低次元の民主主義・平民主義になる。民主主義でなくて独裁的なものは良いかというところもまたいろいろ欠陥がある。何でもそれがやはり権力というものによって動かされている限りはだめである。

詩というものの根元は、『絶対いかなる権力にも屈しない』ということが詩を作る根本的な態度ですよ。

◇詩の衰退と世相

いいですか、なぜこんなことを言ったか。日本でそういう詩を作る人はほとんどいなくなったということはどういふことか。詩なんかいらなくなったのですよ。詩なんか無くなったのです。

ただワーワーと享樂的に歌っていれば良いのだ。皆、何とかひばりみたいに、ばかなひよっとこみたいな歌ばかり唱っている。あれも歌だ。それからああいうものを作詩するのも詩人だ。天下御免ですよ。当節いろいろなものがある。大したものだ。

ラジオなんかで俗謡とか同じような歌を、同じ女の子が唱っているでしょ。歌手だと思えますか。何のことはないですよ。あんたら田舎の盆踊りの方がずっと健康的で良いじゃないですか。

今では盆踊りができると職業的になってしまふ。そして享樂する。享樂は良いけれど、田舎の昔の盆踊りのような素朴で生活と結びついたおどりとか歌とかでなくなった。これはしかたがないというが、僕はそうは思わない。

日本で排気ガスがどうでこうでといっているが、何で自動車なんかに乗ってあるのか。日本人はなぜロバを飼わないかと思う。ロバに乗ってあるのですよ。こんな良いものありませんよ。日本人が一匹ずつ飼ったらいい。おもしろいと思う。なかなかいうことを聞きませんが、学校でも何でもいいじゃないですか。小さくて人を上げがさせるようなことないですよ。日本人にはもってこいですよ。

昔の俗謡で「今度生まれるならロバのつておいで」というのがありました。何も世界が自動車時代とか飛行機時代とか言ってますが、そんなに急ぐことない。あまり急いでいるものだから、さつと行ってさつと帰って来る。同じことやっている。

0のの回転ですよ。そして文明だなどと言っている。文明が人を殺したり搾取する。実に手ぎわよく。つまり知能犯みたいな犯罪ばかりふえてくる。

何が文明で良いかといえば、ひらけたから良いという。僕なん

かひらけて困っている。排気ガスでくさくさって。僕は三鷹におりますが、前は自動車なんかほとんど通ることがなかった。それが夜も通る。ダンブカーまで通る。あんなにしてどうするのだ。だんだん土地も高くなる。なぜそんなに高いのかといえればひらけたから……。ひらけなくたって良いじゃないかと思う。

日本は東京がひらけたために、皆東京へ集まって来る。日本は何かバランスを欠いているわけだな。若い人が田舎にいないということは、それはおかしいじゃないですか。こんな狭い国なのだ。それでなくても人口が溢れる国なのに、ひらけたところへ来ててひどい目に会っている。これは、こっけいだ。

◇戦争と精神のほこり

しかし、これは為政者も悪いと思う。何も工場なんか造らなくても良い。鍋や釜をしょっちゅう造っていたら、一カ月で溢れてしまう。日本で飼っている羊なんか一つの工場で一日で消耗してしまうという。だから豪州から持って来る。なぜそんなことをしなくてはならないか？ 日本人は、日本で食っていれば良いじゃないか。

そこで貿易をする。だからもうける。日本の戦争は何でやったか、古鉄を売ってくれないので米国にふりかぶったんじゃないか。戦争をしかけてくるのを待っていた。やってみるとこんななじめな結果だ。戦争なんて日本の誰が望んだか。日本人は、日本

の敗戦は、日本人の誇りを失くしてしまった。誇りを、民族が一つの誇りを失くしてしまい、上の人が誇りを失くしてしまったのだから、皆、だらしなくなってくるのだ。

人間誇りを持っていなければならない。どんな人でも、誰でも、誇りを持っていなければならない。それが大将だけがふるえたりしてしまったんだから、生意気に勲章なんかつけちゃったりして、おかしいじゃないですか。

参謀総長がそのころ勲章をいっぱいつけて大きなカバンを持って、馬にものらないのに長靴はいて、詰袴の服を着たりしていて作戦できますか。私はものを考える時は、蒲団をかぶって泣くようにした。ものを書く時われわれは、もうどうにもこうにもならないほど自分の頭脳をしばるものですよ。それがあんな格好ばかりしておったそんな奴が戦争するから日本は敗けるのだ。

まあ、まず第一番に、知識が必要だ。日本の詩が感情的・情緒的に、そういうものを書けば詩になると思う。それは悪いことはないが、そんなものが詩の原理だなんていうのは考え方がおかしい。

あなた方に対してこういうことを言うのはおかしいかも知れないが、大体、高村光太郎の詩が良いそうですよ。萩原朔太郎の詩が良いそうですよ。ね、萩原朔太郎の詩はやはり僕から言わせれば、月が出るたびに月に向かって吠えているばかな犬みたいなものですよ。

それから高村のは何ですか、ありや。どれが一番売れたかという智恵子抄だそうですね。あれは細君でしょ。どうして死んだかあなたがた知っていますか。こういうこといってもかまわないでしょ……。あれは氣狂いになったんだな、最後には。高村は高い三階の古いアトリエを持っていた。そのてっぺんに智恵子をあげてそこに閉じ込めて機を織らせた。あの人は昔の青踏社の連中の一人だそうですね、それがどんな症状を呈したかというと氣違いになって女だてらに木にかけ登るようになった。

これは何だと思えますか、閉じ込められ過ぎたから外へ出たいのですな。それを長年女房にしていたんだな。それが死ぬと智恵子抄なんて……、ちょっとおかしいじゃないですか。

戦争の頃あの人なんか一番人気があったので文士の報国会の會長になった。なに戦争というものは、そういうふうになを狂わせるな。その頃内務省が書物なんかの実権を握っていたのですが発売検査でも何でもできた。その役人の中の一人が——偉い方だったが、これは私の如何ともしがたい弟子だったものですから——それが私のところへ来て、何とかして普通の人間に戦争のことを放送してくれないかというんだ。

だから私は言った。

「馬鹿だなお前は。人が横になるから横にならなければならんなんてことないじゃないか。地球が傾いたらやはり傾かないでまっすぐ立っている。これは詩人というのだ。お前ら役人にはそん

なことわかるまい？ 横になれば横になるし、縦になれば縦になる。そんなものなら詩人だったら詩人ではない。世界が傾いてまっすぐ立って立っていると自分が落ちそうになるが、世界の方が間違っているのだ、そういう精神を持たないってことは詩人としておかしいではないか」と。

私はもったいぶって威張っているのではないのだ。偉いといっているのではないが、生まれながらにして片輪者があるように、精神的な片輪かも知れないが、しかし、詩というようなのは意識の中の最も意識的なものです。哲学くらい意識的なものですよ。

◇くらげ詩——詩の骨格と科学

日本の詩には西洋のものと違って科学知識がない。日本の詩は「くらげ詩」だ。はっきりいえば科学精神がないのだから骨がない、骨格がない。くらげには骨格ないでしょ。詩というぼんやりした雲をつかむようなものを作るのに、何らかのはっきりした理論がなくてはならない。その理論をみんな西洋から借りてきたものだから、自分の身につかない。自分で何とかして日本の詩歌の骨格を作ろう。そういうために、私などは比較的早くから、骨格を作るのはこれは幾何学精神だといっていた。

幾何学精神という言葉は、これは大変美しい言葉ですよ。パスカルの言葉だ。パスカルは、それに対して繊細な心、繊細、つま

リデリカシーの心ですな。

それから幾何学精神はもう自然科学のものですね。数学というのは昨日聴かれたが、詩人と裏腹のようだけれども、ひっくりかえしてすよ。現代の詩人で幾何学精神を持たない連中に詩学なんかわかりますか。数学とは論理だ。われわれ、数学が子どもの中からできないという。馬鹿なこと言いなさんな、それは教える先生がへたなのだ。自分が知っているから皆知っているというもので、テクニク・タームは初めの者には、わからない。

私は幾何学が好きだったのが、中学に入って学校へ行つたときにできなくなった。一番できなくなった。点の定義・線の定義、おかしいなど思った。こんなこと考えるべきじゃないんで、何でも先生の言うとおりハイハイと覚えていかないとだんだんわからなくなる。だからその当時、先生が「おまえたちの習うのは初等幾何学のユークリッドの幾何学だ」と、入った時定義するでしょ。いろいろな、つまり定義によってテクニク・タームを用いる。これが何のことかわからない。それをわからせるようにいわねばならない。

だから後年、私は幾何学の教科書を書いてやろうと思った。文部省の検定なんか受けるとやつつけられるかもしれないが、そして私は訴訟をおこしますよ。つまり自分が一番困ったことは何であるか知っているからです。

幾何学は教える方法があるんだな。それはパスカルのように十

二歳くらいから幾何学の定理を発見するような天才ではないからな。天才というものは好かんですけれども、あれは確かに天才だ。

数学は論理だから論理は手順を合わせるもんですな。だから一つ一つ重ねていくと、要するに論理を教えていくとわかるんですね。ただ、面倒だ、実際面倒だ。子どもは覚ええない。第一言葉がわからない。だけどこれは論理学だと思えば良い。日本人は論理的な操作知識がどうしてないか。そのくせ清少納言も紫式部でも歌も文章も書くというのがおかしいのだ。だからあれは女房文学ですな。日本の文学というのは、感情と情緒で良いんだな。

感覚、すべて感覚、しかし近代の感覚はまた違ってきましたからね。これは命をかけているようなものですから、感情書き、情緒の文学ですから……。

川端君なんか、世界で有名な賞をもらったけれどもね。川端は僕より一つ下です。同時代です。僕は横光利一と同じで早稲田ですから。しかし川端君なんか、あの頃からそうですよ、いつでも処女文学だったな。いつでも紅緒のカッコなんだな。あの頃少し有名になった時「この頃うまくなったな」といったら、横光が「そうじゃない、違うんだ。へたとか何とかで無く幼稚だ」といった。

幼稚な文学者が、ノーベル賞もらうっていうのは、どういふことだろう。

しかし私は戦争末期にね、おかしな話だが、トランジスタの原理を発見したんだ。なぜそんなことをしたかというところと日本は敗戦すると皆が困るから世界特許を取らなくてはならないと思つた。皆で取ればよいのだと思つたんだ。ラジオを聞いているとすぐ切れる。それで真空管を見た。すると雲母をつけたり細い針金をぐるぐる巻いたりしてある。これじゃあ切れるわけだ。これは絶対二本の棒でできる。ただし金属を研究する。うんと電気のとおりやすい金属を作る。これは金が一番良いのですが、ないからね。電気のこととはしろうとですが。

そしたら米國で半導体なるものを考え出したんだ。日本で早く僕のいうことやれば良かったんだ。それを僕は専門家にいったんだ。だからやればできたんだ。それを日本人は絶対やらない。専門家でもやらない。トランジスタを発見した人が発表してました。が、僕よりか三カ月あとから思いついた。三カ月というのは大変なものですよ。金属を研究するとまで僕はいつているんだ。これは東芝の工作部の連中にいったんだが今頃になって残念がっている。ざまをみやがれ。

ものの考え方がおかしいな、詩人が考えたなんて大したことないじゃないか、と。詩人というものは見通しがつくものなんだ。昔の予言者は皆詩人ですよ。まだ二、三ありますが、なぜ僕らのいったことを取り上げないかというところ、日本人がそういう理論的な習慣がないからだ。

◇詩歌の貴さと國のことば

日本の文学は昔からいいですね、言あげてない言葉だと。そのくせ一番言あげてないんだな、言あげすべきなんだ。だから詩歌ではね、またこれは違うんだ、一般の普通の言葉と。普通の人にはわからない。つまり文法が違うというのかな。

目に見えないものはそんなに必要か、必然性があるかと考える、日本の文学者たちは。しかも新しい詩にこれは必要以上に必要なのだ。目に見えないからこれは必要ない。これは金にならない。詩歌は金の価値があるかというところ大間違ひ、詩歌というものは無価値なものですよ。

しかし金の羊毛よりも、もっと高いものですよ。本当の価値は純金よりも純金ですよ、詩歌というものは。——そうでなかったら、二千年も日本の詩歌というものが残って来ようがないじゃないですか。だからその証拠に日本の和歌は近代よりも昔の方が良かった。

もちろんみんな万葉やりましょ。万葉の歌は良いですよ。いつ読んでも確かですよ。万葉のうちでもやはり王者の風格のあるものは、どっか立派ですよ。例えば僕が好きなのは女の人で、額田王の歌は良いでしょ。ほればれるする歌ですよ。あの人があつたかどうかかわからんと、このごろいわれているけれど……。

やはり王者の風格がありますよ。柿本人麿は嫌いな歌ですよ。

心もちがすでに違うんだな。その心もちはこういうのですかといつても目に見えない。その目に見えないものが必要なんだな。必要以上に必然性があるものだ。

目に見えない価値のないもの、そういうことを日本の人間はどうしても承知しない。目にする価値のあるものでなければ納得しない。これは、おかしい。

全然違った言葉がこれで二つに分かれるのだ。つまりコミュニケーションという言葉とエクスペリション、表現と契約の言葉と二つある。もう一つわれわれの言葉に何があるかという、地方語をみるとわかりますね。純粹に薩摩の人間と純粹な青森の人間を突然媒介なしに合わせてしゃべらせてごらんさい。ちつともわかりませんよ。コミュニケーションできないわけだな。どういふわけかというとその土地の生活が違います。代々の言語の受け答えが違いますね。それに封建時代がありましたから、秘密を外にわからぬように特にそういう言葉を作ったようですよ。

「武士とは死ぬ事とみつけたり」なんておかしな文章ですよ。佐賀の言葉ですが戦時中随分読まされたけれど、つまり言語には秘密結社的方法がありまして、その当事者だけがわかる符号みたいなものになってしまふ。僕らからみれば地方語は符号の一種ですよ。コミュニケーションはその人たちだけで通じるものだ。

それからもう一つ言語というものが大切だということは、アメリカニグロのあのジャズって何だろうと思う。あれは自分の生ま

れた国の言葉をすっかり亡くしてしまつたんだな。本当の自分の土地の言葉を忘れてしまつて、米国で白人の中にまじつてけとばされながら最低生活みたいなものをやっている。

戦争になればひどいことやられている。アメリカの言葉は大した言葉じゃない。スラングですよ。あれはイギリスの言葉だと思えますか。——イギリス人の英語ははつきりわかる。イギリス人だつておかしな言葉を使うものはたくさんいますよ。それは別として、国語としてね……。

年々、国語を美しくしていくような運動が日本にありますか。つまり童謡を作る。童謡を作るのも皆職業家ですからね。それが金になるからすぐ作る。

童謡は、子どもの最初の言葉ですよ。そして何にもおもしろくない。詩はつまり自分が子どもであつたことを忘れてるのでですよ。それがニグロのように突然音楽として発生してきた。太鼓ですよ、バンバンたたく。あれはアメリカインディアンにもあつたわけで、太鼓という空洞をたたくシャーマンのものですよ。あれに誘導されたんだと思う。そして言葉のかわりに音楽として出てきたジャングルの言葉ですよ。自分の言葉を亡くしてしまつてアメリカのスラングばかりやっているわけです。こういう悲しむべきことは、さつさとやめてくれといたい。私はアメリカに教えてやりたいことがある。「アメリカニグロを解放しなければだめだ」と……。

自分の故郷を失なったものは何らかの形で故郷に帰らねばならない。

◇詩作のきびしさ

世界中がいたるところで無理している。こんな無理なんかやめた方がよい。

労働をすること、自分でやる労働はそんなにづらいことではない。私は原稿を書いて五十年、六十年になるが、こんなに苦しい仕事はない。皆が寝ている時、朝まで起きている。そして誰も頼るものが無い。字引があつたつて、そんなもの、冗談じゃない。じゃまなのは一切おかない。

あなた方、東京に住んでいて、ペンのインキが凍る現象に逢つたことがありますか。僕は毎日逢つていますよ。五十年も逢つている。朝方になるといても立つてもいらなくなる。火がありませんがね。ペン先につけたインキが書けなくなっているんで、おかしいなと思つてみるとインキが凍るんだ。

私は仲間に聞いても、めつたにそういう連中に会つたことが無い。こいつは朝まで起きていないんだな。今なら万年筆がある。しかし私は一回も万年筆を使ったことは無い。なぜならあんなもので書くと字が機械的になつてまづいから。

やはり美しい字の方が良いですよ、だから習字を習いに行くんですよ。良いでしょ、習字つてものは、ひとり白い紙に墨でこ

うやって筆を動かすたびに、その墨が、すうっ、すうっとしみこんでいく。その感触というものは、すばらしいものですよ。それからだんだんと字がうまくなればいっそうね。だから何でも自分が主人になることだ。どんな行動でも主人になること。

これはもう誰でもやれることだし、命令されなければやれないなんておかしなことですよ。これは巡査か軍隊の一兵卒ぐらいのものだ。号令されれば鉄砲がついで背が立たない所へ入つて行つて皆死んでしまつたでしょ。あんな残酷なことは指揮者が悪い。指揮者があんな馬鹿なことするんだ。つまり知性というものが無い。何にも物を考えないからあんなことをするのだ。ちよつと考えてみたら良い。

それだから例えば、運動なんか好きでやっているのに学校のために勝たなきゃならない。何言つてるんだ。運動の喜びを自分で知つたらそれで良いんで、何もそれで偉い人にならなくても良いんだから……。いわんや詩なんぞというものは目に見えないつまらないことをやっているようだけれど、金にならない。そして職業としても。私は職業とは思っていないけれど……。

僕のところへ巡査が来て職業は何だというから「何だろいうなあ」と言い「原稿など書いているんだ」といったら「ア、それは著述業だ」というんだ。が、これは職業としても間に合わない職業ですよ、要するに。そして原稿書けば一枚ちゃん一割から一五パーセントの税金をサラリーマンみたいにとられるでしょ。

これなんかなぜそうなったかという、菊池寛からの僕は濫觴だと思ふ。へんな馬鹿みたいな小説書いてどんどん売れたわけだ。文章家としても、いや文学者としても食えるものだというのが政府にもあるんだな。何でも書けば……。

私は一年ばかりかかったのですが——僕はやらんよ、ほったらかしておいた——僕の全集の第三回の校正ができた。それを見ると皆で詩が五十篇あるそうですよ。そうすると「先生は詩を書いてきて五十年で五十篇ですか、そうすると一篇十万円もらったって、五十万円もらったってこれはしょうがないですね」と編集者がいう。いや、それでも多過ぎるんだ。誰でもそんな十万円くれる人なんかいない。それで、金をくれるような原稿は書くなどというんだ。そんなものはやはり金を相手にして原稿書いているから、金のための原稿なんで、純粹な詩なんかではない。金をとるということから自分のものではない。

五十年に百篇ないと、間に合わない職業ですよ、ね、だからこんなもの職業にならんのですよ。はじめから職業にならんのだから絶対にあんなものやるもんじゃない。いったん詩を書くことやばり良い詩を書きたくなる。

金になると金になりたい詩を書くようになるでしょ。だから皆そっちへ行ってしまふ。詩なんか書けっこない。だから金にならない方が良いんだ。これは金になれば商品になってしまうでしょう。そんなことは、詩などは魂が抜けてしまいますよ。というよ

うな比喻でもよいわけだな、詩というものは、先程もいったとおり純金以上の純金なんだ。

しかしこれが何にも目に見えない。コミュニケーションで人間と人間の相手があって約束してできた言葉でなく、モノログなんだ、一種のノ人にはわからない言葉なんでひとりですべて書いてるんだ。

いいですか、モノログなんだ。

◇詩はモノログ精神の王者——

詩の本当の形式はモノログだ。これはただお前がもしいったとすれば紙と対話している。紙は答えなんです。自分に対して問を發した時、自分の中から応えてくれる。

徹頭徹尾、自己の頭の問題ですね。思索点検の問題です。この点はまあやめた方が良くと思う。そして売れたという詩をみますとね。何かやはり婦女子を相手にしたもの。それは読者を意識して書いているからですよ。皆そういう人間なんだな。売れるって人間はノ

例えば西条八十が出たこともあります。女の子が喜ぶような詩を書いている。もうちゃんと目標きめてやっているから、今の八百屋なんか同じですよ。あそこへ持って行けば、ここへ持って行けば売れる。そんなことしちゃ駄目ですよ。商売ではないのだから。だからこれはこういうことなんだな、劇をやらざるを得なく

なつたとする。劇というものは対者つまり二人以上の者が出てきて各自の性格とかその時代とかある種の構造の原理がある。そして二人の対話から違った性格の者が話しているうちに葛藤するんだな。

その葛藤の立場を見ている観客があつて、劇というものは観客に見せるために行動する。だから時によつてはシチュエーションを作つたりギャグを作つたり、いろいろやつてゐる。こんなことわざわざいわなくても皆さんわかっていると思うが……。テレビ見たつてわかるんだから、ばかな漫才が出て来て二人がガタガタやると皆喜んでゐる。しかし完全にあれはもう享楽になつてゐるでしょ。今はそれは仕方がない、商売だから。

しかしね、詩人が独白をやるんだ。

独白をやつてゐる変な嗤家もいますよ、だけれど観客を相手にしてやつてゐる。こういう点がどうしても良くわからなかつたら一つ例をあげましょう。

私は三船十段という柔道家と橋で一時間ばかり話したことがある。誰もいないところで、いろいろ話しているうち菊五郎の芸談などが出て、女形だから女以上の女になるとか、踊りをおどる時腰で踊るとか、それぞれの動きがうまいとかいふた。そして彼は「吉田さんはどうですか」というから、「天下無敵だよ」、僕は「天下無敵だといつたんだ。そしたら三船十段は「俺はいつでも負けたことない」っていうんだ。「いや僕が天下無敵だというのは

何も誰に勝つた負けたとかではない。詩を作る時には誰も相手がないんだ。あなたにも菊五郎にしろ相手があつてこそ勝敗がある。だから僕が天下無敵だというのはあたり前じゃないか」つていふた。僕は相手にしてゐない。誰も、自分が詩の主催者であり、実行者であるし、自分が書くんで誰からも命令されない。

本当の仕事というものは——こんな格好をして出て来て、こういうことをいうのはおかしいけれど、詩人というものはそれこそ精神の勇者ですよ。誰もわれに命令する奴はありませんよ。「ほれ書け」「あれかけ」「嫌だ」つていへばそれまで。「お前書け」つていうんだ、「書けんのか」つて。

だから王者の気持に、つまり王様の気持にさっきからなれつていふたでしょ。万葉なんか見ても家来の詩はだめです。柿本人麿も駄目だつていうんです。

しかしやはり天皇の歌は良いですよ。こういう気概が無ければならないですよ。あれは新古今だけれど、隠岐に流された。後鳥羽上皇のね、

我こそは 新島守よ 隠岐の島の 荒き波風 心して吹け
なんて、どことつたつて大した器だと思ひますよ。

新古今というのはいろいろやつてみたけれど、つまらないものですよ。ただ良いのは西行だけ残つた。西行の歌は十数首あつて大したものですよ。

◇表現と理解

そこでさっきのモノログによって提出された問題、つまりコミュニケーションと表現ということ、これはコミュニケーションが言語だから規約をしているわけだな。言葉と言葉で——二人の者が約束しているわけ、それで話し合いは通ずる。

ところが最初の論文集を出した時、私は序文にこう書きました。

『元来言葉というものは通じないものである』今でも間違っていないと思うし私は一生これを信じますよ。

なかなか君、話せばわかるなんて、どこにわかったことありませんか。話がわかり合っていれば戦争なんか起きなかつたですよ。はなし、これは何にもわかるものでなく通じないものですよ。本当のコミュニケーションだつていつたつて、人をごまかして雑誌売るため新聞売るためのかけ声ですよ。

文部省で定めたとおりだけのものをやつていけば皆わかつていくだろう。わからない人間がたくさんあると、それはできない人間だという。じょうだんじゃない。言語というものは難かしいものなのだ。で、コミュニケーションというものはわれわれが日常生活で実用語としてあるわけだ。計算・統計・売買する、そういう言葉ならばはっきりわかってくる。その場でも……。普通の言葉できえ話し合いはなかなかできない。

弁護士なんでもちろん条文をひっくりかえして、ああだ、こうだ、大丈夫だとか何だとか言ってますが、日本の法律の文章なんておかしなもんですよ。

つまり私が地所を借りて家を建てた。一年ばかりして安い地代だがためなんだ。そうしたらすぐ訴えられた。訴えられたから結局何か判決があると思つて行つてみた。そうしたらこう書いてあつた。判決で「払つて出ろ」というんだ。「今までたまった地代を払つてすぐ出ろ」「いや払つてから出る」「裁判長そりゃおかしいじゃないか」といつた。

「日本の文章ではない。そして、か、払つてただちに、とか副詞がない。俺は日本の文学者だ、少なくともそんなおかしな文章だから従うわけにはいかない。払つてから出ますよ」といつたら「それでは困る」つて……。それではじめて「払つて出ろ」が「払つてすぐ出ろ」「払つてそして出ろ」というのでもないのがわかつた。

これが日本の法律文ですよ。こんな言葉で、日本で普通の人々が商売できますか。これが法律というものを専攻している人たちの、えらい頭だと思ひますよ。つまり日本語はそういうデタラメなんだ。おそらく憲法なんかでも普通の散文として皆おかしなことになっているのじゃあないか。

米国でこういう意味にとつたからわが国でこういうふうにとつた。おそらく同じ憲法でもちがつていよう。条約なんかで

も全部そうだ。だからコミュニケーションでも本当は通じないんだな。理解し合わないんだよ。

戦争の悪いのは誰だかって知っていますよ、暴力は動物の原則かも知れないけれど人間の原則じゃない。そして何千年経ちましたか、人間が人類として正式に立ち上がってから何年経ちましたか。相変わらず暴力をもって、方をつけている。ちょっとおかしいじゃないですか。

◇論理を貫け

そういうことで、知性というものが万遍なく行きわたり、せめて日本だけでも論理でものをいうようになりたい。その論理を欠くということこれは恥だと思うな。日本の国民の一番の弱点は、論理性を欠くということ、それで逃がっているのか……。

詩歌は思ったとおり書く、思ったとおりなんて書けるものではないですよ。思ったとおりなんて書ければ大へんなものですよ。

みんなこのごろはヨチヨチ歩き出すと、母親が鉛筆持っていったことを書いてますよ。小学校になれば、自分で鉛筆持って書いてる。そんなものはね、何ていうかな、幼児は意思表示も自分の行動もできない人間だからワーワー泣いているのと同じで、駄駄をこねている。それは単なるヒステリーですよ。

子どもが詩を書いたからって、うちの子は天才だなんて。そんな子は二十歳になれば皆郵便配りかになくなってしまふ。――

これはアメリカの例ですが――だからそういう天才なんか信じないこと、天才などということは信じないこと。

これはあなた方だってお母さんになるのだから、自分の子は天才だなんて思わずに、とにかく論理的にものを考えるように育てる。それじゃ理屈っぽい子どもになる？ いいじゃないですか、理屈っぽい子どもになったって、その理屈が正しかったらその通りするのがあたり前です。

ただ詩歌がそんなもの無くたってできると思うだろうが、そんな生ぬるいことでは詩なんか、これからの詩歌なんか書けないですよ。私が日本の自由詩というものはくらげ詩だといったのは、そこなのだ。理論の骨格がない。しかも詩というものを作り、一つの精神の存在を明らかにするためにそういうものがなくてはならない。

人間が精神の路面を作るためには、どれだけ苦労しなければならぬか。そのために何か骨格になるものはないかというところがある。何も幾何学の実験のことを考えなくても良いですよ。頭の中で幾何学の原理を証明しろっていうのです。幾何学というのはおもしろいんだな、公理の中からとび出していったものを証明しなければならぬ。

詩は証明しなくともできるんだな、詩は証明しなだけでいいんだ。いいんだというのはおかしいけれど、そんな面倒なことはいらない。それ以前に面倒くさい操作をしているわけです。これは

メタフォアというものを持っている。メタフォアというものを持っていてと下界を自分の体内に交換する。メタフォアによって。物質を自分の頭脳の中に入れて来る時に何か代償を払うんだ。その時メタフォアという代償を払う。

◇芸術のリアリティと理解

それで一つのリアリティを持たせるといことになりませうけれども、リアリティというものは何もわれわれの日常茶飯事のく、ソリアリズム、リアリティであると現実主義者というだろうが、そんなものはむしろいらぬのだ。日常の生活において私の机とその机と台所と直結してないんだ。これは一つの独立した世界なのだ。断絶している。

私は詩というものをそのくらいに考えている。詩というものはもうこの世に無いのだから、それを自分が創造することによってできる。できるということはどういものがか。——目に見えない必然性。だからこれほどリアリティなものはない。

だからバルザックの銅像が、バルザックよりもバルザックである。庭に立っているバルザック像がね。やっぱりロダンはいえらいますよ、芸術ですよ。そういうところに芸術のリアリティというものを見てもらいたい。

ところが日本人はなかなかその精神上の必要な、必要以上に必然的なもの、動因があるということを、どうしても承認しない。

わからなきやあ良いですよ、人が作ったものを見てわからないという。ちょっとでもわかればこれは良い詩だ、または悪いなどという。おかしいですよ、彼らにそんな権利は無いですよ。人がつくったものに対して、創造したものに對してね。どうだこうだと……。そういうことになればね、私はダンテを批評した人の言葉を用いますよ。

「世界は何故かくあるか」こうあつてはならないという詰問です、ね、世界は。

例えば日本の政府はこうあるってことは「それは当たり前だ。大きいものにはまかれろ」これはいかん。こんなことをしてはいかん。そういう詰問している顔だっていますね、ダンテは。ダンテは地獄とか天国とかを書きましたけれど、本当にあの人は経験しているような書き方ですよ。経験以上の経験をしているのだ。それが本当に必要なだったんだ。だから架空のものだけに、その実際の物以上にダンテには見ええんだ。

ダンテという詩人には見ええんだ、地獄が。それが見えないなんていう人がいればやっぱり私が今いっているようなことを理解しなかつた人だ。見ることができなかつたんだ。だから一つのものを見るということは非常に難しいことなんだ。

特に新しい詩というものは……。

私たちが何かの花といった時、花なるものを否定しているんだと思う。この世にない花のことをいっているわけだ。その時は

否定しているんだな、どんな花でもないんだ。

マラルメが一つのコップを見た。そうするとこのコップにコップという名詞がなかったら何だろう、何というものだろう、詩人というものはそういうふうに見える。物は人が最初に名称をつけたものでしょう。ガラスというものはガラスですよ。フラスコという言葉がなかったらわれわれはどうしてこれを使用するかということがわからぬんだな。ある適切な名前をつけた時、実用品として通用する。

実用でないものに名をつけた時何と言いますか。そこが詩を創造していく時の言語の過程ですよ。

人がわかるから良い詩だなんて、とんでもない話。わからなくたって良いですよ。しかし自分が作った詩だ。つまり自分が精神的に作った詩の一つの存在がここにある。作らなければ知らぬんだ。ないんだ、いまごろ。そういう存在をここに明らかにしなければならぬ。だから初めから見えない者には終わりまで見えない。永久に見えないんだ。最後まで見えない。

マラルメ（一八四二—一八九八）なんかだつて死ぬまで本にしていけない。やはり氣にくわなかつたらしい。いったん活字にして、こういうやり方がいけない、ああいうやり方がいけないといつて、本が出なかつた。死んでから出た。婿さんが医者ですから、今ではその人も娘さんも死んじゃつたけれど、あれはなかなか偉い詩人ですよ、象徴派の十九世紀最後の詩人ですね。

ボードレー（一八二一—一八六七）が前のロマンチズムとシンボリズムの橋わたしをしたが、マラルメのは象徴主義の理論を作り最後にすばらしい詩を作っていますよ。

いま日本にもえらい詩人がいっぱいいるんですよ、若い人にも、そんなのわかるか、——わからないですよ。

初めて「サイコロの一ふり」というのを訳して、前文をつけて出した。誰だつてわからない。殊に象徴主義というものは、そういうものですよ。

しかし今の詩はその点からいえばわれわれにわかるようになって、ほとんど言語分裂症みたいに何をいつてるのか、殊に米國からきた現代詩たるものは、めちゃくちゃだ。わざと文法をこわし、言語をバラバラにして組み合わせる。で、これは新しい詩だ。そんなことする必要ないんだ。これは意識の問題だから、意識の構造というものはいくら高度でも良いんだ。あのやり方はおかしいと思う。意識をずうつとやっつけていけば、そんなことなくても済むわけだ。それだから言語というものが非常に大切なことなのです。

◇美しい詩と学習のすすめ

目に見えないけれども何方の価値がある。三億円盗んだよりね——日本の言語を盗んだ奴はすぐ見つかりますからね。言語を盗んでいけば、しかし価値がありますね。日本人は良く考えるとい

うが、考えているのではない。考えるフリをしてるのだ。日本文法の車にのって、そして考えもたぐるぐるやっている。論理だけがくっつけばそれで考えたと思ってる。馬鹿なこといいなさい。私の書いた文章の中にこういうことがある。

「考えるということは、一語、一語、つまづくことだ」どうですか。これをしないで考えるなんていう奴は、これは考えていない。文法の車にのってただ走っているだけだ。そんなことで物事なんていうことは考えられるものではない。いつでも根底を疑い、そして自分が発表するものが何であるかということになってくると、およそ日本の文法の車にのって走っていられるか。

いわんや詩は、まるで手で、たった一つの手でピラミッドを積みあげるようなしつこいものだ。そのくらいの労力があるものですよ。

だから言語を美しく使うような国になりたいな。明晰な日本の文学は、言葉はかつて美しかったのだ。これは王朝の文学だけで言うのではない。無情といった言葉がわかりますか。僕は、もの、あわれ、という日本語にしなければ感じが出てこないほど、美しかったものだった。

外国の本が見たかったら、なに翻訳なんかで見ることはない。これから詩なんかだけは、絶対に翻訳で見ない。困るだろうけれどどんな難しいものでも良いから、とにかく字引と文法書で直接原文で読む。まず外国語を一人一カ国語で良いから完全に読めるよ

うになる。そうすると、「ああ、あちらの詩は、これだけ日本の言語と違うんだ」ということがわかり納得してきます。つまりそういうことは言葉の問題につながることですから、それをやらなきゃいかん。そしてたら日本の言葉の美しさと欠陥が良く比較できる。

それでさっき言ったリズムのことも「なるほど日本のリズムと西洋のリズム」との相違があるんだ。支那はアクセントがあるんだ。アクセントがなくてそれに伴う、リズムもくそもありませんよ。ただ、日本でリズムといわれるものは、音の数の組み合わせによるのもって基本とした」というのが根本的なのだ。

これから日本の詩がたくさん出るでしょうが、問題になるのはいつでも音韻の問題だと思ふ。今でもやっている人がありますけれど、今の若い人はてんであきらめちまって、散文ばかり書いている。

散文は詩じゃない。散文は。

ヴァレリイがいったように「散文は歩く、詩は踊るのだ」と。踊りと散文。

もう一つ教えると、英語なら、英語をやる人はフレーズで覚えているんだな。短いフレーズで。だからぱっとフレーズが頭に浮かんでくる。これは忘れないものですよ。

だから単語を覚えるのも大切だけれど、一つの短い文章を全部暗記してしまう。そういうやり方もこれはやる上に必要だ。語学

はやっておいて損なことはない。これは女性にもってこいのことじゃないですか。そんなもの売り物にしなれば損はない。だからこういうことではないかな、やはり知識の喜ばしさということが絶対だ、根本的なことだ。

ヨーロッパのえらい人は各国の各大学を遍歴して歩いたな、ゲートルも歩いたですよ。ポローニア大学やイタリアの大学に入ったリスペインの大学へ行ったり。日本もそうしてやれば良いのだが、なかなかやってくれないようだな、派閥があつて……。日本は何でも派閥があるから仕方ないでしょうけれども。

少し金のある奴は外国へ行くけれども何にもならないですよ。支那料理と向こうの女を買つて、それで帰ってくるようだったら何の留学かわからんでしょうが……。だからそういうことをしないように知識ということの喜びを持つていけば良いわけだ。喜びでなければ、知識なんか僕は持つべきでないと思う。

◇国語を愛し、日本を愛す

プラトンは前にうまいこといつているようです。あの時代ですから拡声機もないわけだ。人が演説して聞こえる範囲内の国家を作れ、これはなかなかね。東洋の思想にもそういうものがある。「寡民小国」つまり少ない民で小さい国を作れ。老子様の言葉ですよ。皆の意思が相通じるといふことですよ。理想国家ですよ。なかなか昔の人はうまいことをいう。

どうも日本は多過ぎるんだから。多過ぎるつたつてやり方があると思うんですよ。昔はブラジルに移民した。僕はあれは棄民という。民を捨てる。捨てにやる。日本はあと何にも援助しないんだ。広い国があるとか何とかいってあととはかまわない。追い出したら最後あとは知らない。日本の棄民政策、僕はもつたいないと思うのです。

米がたくさんできたという。たくさんできたから捨てるとかはそに持つて行ってくれるとかいう。捨てるなんてことはできないことですよ。百姓たちから高い金で買上げたのは、私たちの税金から払った金だから国民にいう権利がありますよ。

要するに何でもそんなことばかりしているんだ。これは何かという要するにね理論が発達していない。ただの官僚主義のやり方を真似しているんだ。代議士が立っているがやはり何ですか。何か月給もらうために代議士になっているだけだ。

代議士になつてしまえば自分のことしか考えない。考えているふりしているだけだ、あれこそ。議会というものは言葉と言葉の論議なんだ。そんなら理屈の通る方に責任を持たしたら良いじゃないか。正しい方が何時でも負けているではないですか。ある意味で。

つまり少数党と多数党ということ。こんなもので表決ができるもんじゃない。多数決なんてある場合、もうごく簡単な場合はできるかも知れない。いつでも少数党が負けているという状態、そ

れは理屈がとまらないのだ。わかっても知らん顔している。

ですからわれわれが委任している議会というものは、信ずるに足らないというのは、論理的に信ずるに足らないということですよ。少教党が確かな理論を持って、それが正しかったら、それに対決すべきじゃないですか。それが何時でもできない。うそばかり。

沖繩、帰った帰ったという。ところがそれを選挙に使った。まだ帰ってこないじゃありませんか。そんな帰るべきものなのかどうなのかはつきりしないくせにね。

ロシアなんかにはだんだんと取られてしまった。あれも理屈がないからだ。政治家というものは理屈がないんだ。確かにあれは強盗ですよ。ロシアなんて昔から強盗癖がありますからね。何も足りやしないのに、あれはもう足りたものとふんだくられちゃう。それから何べんいってもわからないんだ。

だからあんな戦争するなといった。泥棒なんかを相手にしてものがいえるものではない。「泥棒にも三分の理あり」と泣き寝入りの言葉があるが、そういう言葉だけは日本は発達しているんだ。そこが言葉というものの論理性がないということなんだ。感覚で感情的で情緒的で、それをわれわれは詩歌の問題としていたんだ。だめです。そんなものでこれからの詩歌ができたらひっくりかえってしまう。いまに、こんな状態だと、何かによらず、だんだんに不合理なことばかりやっている。これは日本を滅ぼす政

策かも知らん。

滅ぼされたらかなわんと思つたら、皆一人一人滅ぼされないうにしなければならぬ。

理屈をいうんだ、理屈を。「あの奴は理屈を言いやがる」理屈で結構。日本語でできるだけの理屈をいってごらんなきい。

言葉っていうものは理屈をいうことのできる道具の一つなんだ。暴力よりも何よりも。

こういう例があるでしょう、戦争中に古典を大事にしたという話を。皆さん知っていますよ。それだから僕はあえてそんなこといわないけれど、古典を大事にしない国民は滅びますよ。滅びるといえば本当に滅びるのですよ。戦争前だつて論理を尽くしていれば、そしたらあんな馬鹿な戦争はしないというのだ。

今日のようにこんな何だ昭和元祿なんていうが、デカダンスだ。腐敗した、今の状態ですよね。

健全な、健康な国民にならなければいかんと思つたら、まず国語について考えていかねばならぬ。

(詩人)

(一九七〇年七月二十三日 お茶の水女子大学日本

幼稚園協会主催、幼児教育講習会での講演より)

遊べない子と現代の幼稚園

(2) 遊びをつくろう

有 木 昭 久



◆動物の遊び

私たちは雀が、木から木へと、屋根から屋根へと、かくれんぼやおにごっこに夢中になってチーチーチーチー、うるさいくらい遊んでいるのをよく見かけます。

アメリカのハイイログマは、雪の山を頂上までせっせとよじ登り、何度も繰返して、滑り降りるのが好きだそうで、なかなかの遊び家です。

ふしぎな遊び方を考えたカバの話もあります。

一枚のカエデの葉っぱが、カバのプールに落ちました。カバはそっと潜って、木の葉の下までいき、みごとに鼻息で木の葉を吹きあげて、落ちるとまた吹きあげ、カバは何時間もその遊びを続けたということです。

この話を聞いて、私は江の島マリランドのイルカのことを思い出しました。

これらの動物が遊ぶようすは、人間の子どもが遊ぶのとおどろくほどよく似ていますが、遊びを考えつくり出すのは、人間だけの特徴ではないようです。

◆楽はできない

社会がますます繁雑になってくると、ひとつひとつのことが大変めんどろになり、できるだけ楽をしようということになります。幼稚園や保育園でもこのことはいえます。先生が子どものために遊び道具をつくってあげ、それがその園の宝物になっているという話はあまり数はないでしょう。先生の心構えの問題ともなりましようが、表現活動の大胆な創作の

できる先生たちですから、きっとすばらしいアイディアを持っているのに、とてもおもしろいのです。カリキュラムに追われてそれどころではない、という陰の声が聞こえるような気もしますが、子どもの喜ぶことをいっしょうけんめい考え、実施していくことには、園によっては、かなりの勇気が必要となってくるでしょう。ですから逆にいえば、すばらしい仕事だと思ふのです。そのためには、自分が楽しかったことを伝えていく必要があります。自分がおもしろくもない、おもしろくないことを、いくらいっしょうけんめいやったとしてもくたびれるだけです。しかしこのことでくたびれている先生が多いと聞いています。

◆遊べない先生

よく遊びの苦手な先生の話をお耳にしますが、一つには、自分で遊びの楽しさがわからない人、二つには、**教育者**？であるから遊びなど教えている時間がないという人、三つには、遊び方がわからない人、などがあげられます。

私たちはよく思うのですが、きれいな空気が吸いたくない人、テレビがないとだめな人、大声で笑いたくない人、歩くことが嫌いな人、自分が今できることは何だろうと考えない人、マンガが嫌いな人……には、きっとこれからの話は通じ

ないかもしれません。

◆常識？

AはBに使うものである。AはB以外には使えないor使わない。これがあたり前常識という言葉に置きかえられ、目のみない活動がたくさんあると思うのです。

子どもの遊びを見てみると、おとなにとってはすわるための椅子であっても、子どもにとっては大切な自動車に、飛行機に、船になったりすることは、よく知られています。

こういうことは、ある程度、予期することができません。しかし、全く予期できないことが起こるとすぐ……**禁止令**を出すぐせが、おとなにあるようです。

最近特に、おとなが予想のできる遊びしかしらない子どもが増えてきています。

これはもしかしたら、**家庭や幼稚園での規制**（しつけ）がいきとどいているせいでしょうか。

“あつ”と思わせる子どもが少ないのはとっても残念でもあります。

しかし、私たちは、子どもたちの心の中に、**グラグラと煮えたぎっているはずのエネルギー**（遊びの世界への没入）を正しく受けとめるためには、**常識を破れる個人**になる必要が

ありましよう。

◆灰皿の話

まだ、創造性開発という言葉が、最近まできかんでなかった頃、あるレクリエーション・リーダー研修会で、灰皿の話聞いたのです。そこでの題は、「灰皿を他に使えるとすれば何に使えるか」でした。

私もかなりの常識を破れない人間の一人でしたから、びっくりもしました。「灰皿は灰皿以外の何ものでもない」この常識がとっても邪魔になりました。私の考えたものは①円をかく、②帽子にする、③お茶わんやお皿のかわり、ぐらいいかできませんでした。

これは後にわかったことですが、ブレインストーミングという方法でした。

かなり貧困でお恥ずかし体験ですが、私のアイデアの出発点がここにありました。

◆きっかけから創造へ

いつ、どこでも、だれとでも簡単に楽しく遊べたらなあ」と私たちの子ども会活動でいつも思ったことでした。

今まで、本や研修会などで学んできたものは、あくまでも

自分のものでなく、他人のものでした。もちろん、そのまま受けうりしてもだめなことはわかりますが、なかなかできません。しかし一つのきっかけにすることは必要なことです。

これは自分にだけしかできない（人間性も含めて）という遊びのスタイルをつくりだすことができたならばらしいのですが、ちょっとしたはずみ、何か得体のわからないことが遊びの世界をつくり出していくのではないのでしょうか。

◆キャベツの話

幼児から小学三年生までを集めて、子どもクリスマス会を開いた時、フランス民謡「キャベツの植え方」ジュエスチャーソングを劇の間に入れることになっていました。

ところが本番になって（練習は少ししたのですが）とんでもないへまをやってしまいました。

本当の歌詞は、「一、キャベツの植え方 ござんじでしようか わたしの国の キャベツの植え方 二、手でもって植えます わたしの国では、手でもって植えます わたしの国では 三、足でもって植えます 四、ひじでもって植えます 五、鼻でもって植えます」と続くわけですが、曲も忘れ、歌詞も忘れ、つい口にてたのが静かな湖畔の曲で、

「一、キャベツの掘り方ござんじですか 手で掘ってごら

ん 手で掘ってごらん ビポービポー ビボビボビボ」大立ちまわりで冷汗をかきながらの奮闘でした。これに調子を
得、やめればよいのに、子どもたちに向かって、「今度何で
掘ろうか」「口々に「頭」「足」「へそ」「耳」「お尻」……。

そこで次から次へとやってまいりました。まったく予期し
ないことが自分の中に起こり、子どもにも起こったことでし
た。

わたしたちが大切にしなければいけないことは、カリキュ
ラムをたてたからといってそのとおり無理に遂行せずに、子
どものようすを見たいものです。意外と即興でやったことの
中に子どもが生き生きとしたという経験は、多くの先生が感
じていることでしょう。



遊びは、かなり、このような即興性を持っています。

室で、庭で、ホールで、廊下で、園外で、どんな広い所でも、どんな狭い所でもできることが必要です。都会の子どもたちは、地方の子どもに比べて狭い所で楽しく遊ぶ方法がかなり優れ、逆に、地方の子どもは広い所で遊ぶのが優れています。これからの遊びを考えていくのに、両方の利点をうまくミックスしていくことが大切だと思います。

◆子どもに負けない遊びづくりの名人

子どもは遊びづくりの天才といえます。本当に子どもが気がつかない、すばらしい遊びを次々とつくり出していきます。

しかし、おとなも負けてはいけないと思います。企業でのアイディアは生産に結びつきませんが、教育での創造活動は、生産とは直接結びつくことなく効果も明確なものでないだけに報いが少ないのですが、こういう目に見えない活動が大切だと思えます。私たちは、ともすると科学的という数字の魔術に（コンピューターに記録される資料の少ない中で）だまされてしまいます。本物とにせ物を感じることでできる感覚（芸術性）を養いつつ、子どもに負けない遊びづくりの先生になることが、ひいては、自分の成長にもつながると思うのです。

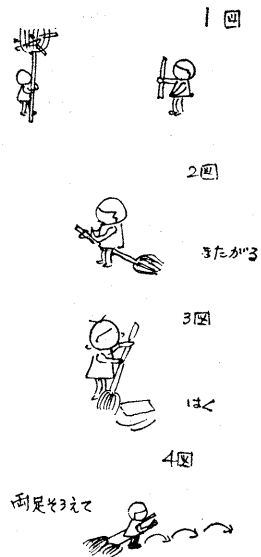
◆びっくり

寒い時は室の中で遊ぶもの、雨が降ったら外にはいかないなど、幼稚園の中での常識が、風邪をひいたら心配……と、家庭と同じ心配を先生がしていることに私はとても反発を感じます。前回の野外活動の中で、自然との交わりを中心にしてこのことにもふれました。

子どもにとって当たり前のことが、先生に当たり前としてうつらないとするなら子どもは不幸せといわねばならないでしょう。

幼稚園の先生と研究会を開いた時のことですが、ブレインストーミングについての話をした後、まず手はじめに「ホーキを使った遊びを皆で考えてみましょう」と言ったところ「叱られます」という返事、「ホーキは遊びに使うものではないし、きたないですから」

「叱られます」は園長先生が、AのものはBとしてしか使ってはいけないという方針を打ち出しているからだそうですが、私がなぜこんなことをいったのか「びっくり」したようです。叱られるかもしれないというひっかかりが私にはわかるような気がするのですが、常識を破るのに一番身近だったことがこれを選んだ理由でもあったわけですが、とにかく基



本的なこととしてホーキに関することだったら何を言ってもよいという具合にして遊びを創ることになりました。

- ①新聞紙でまいた棒をホーキにさしてくる ②昔でいう竹馬ごっこ ③新聞はき ④ホーキスキー ⑤お人形さんつくり等がでてきました。ホーキという器材が立派な遊び道具になったわけですが、園長に、叱られても私が責任を持つという条件で実施に踏み切ったのです。

子どもたちは、何が始まるのかわからないようすでしたが、やがて先生がつくった遊びが始まりました。

②図は、魔法つかいのサリーちゃんだと大喜びで、チームに分かれて対抗リレーをしました。③図はいっしょうけんめいはいてもなかなか思うようにはけませんから愉快です。④のスキーも得意満面でした。

これだけをした後、子どもたちにも遊びをつくらせてみま



した。自分でつくったものを皆がやってくれるのですから、子どもたちは大喜びです。

①後はオーライ(写真参照) ②ママと仲良し(図参照)

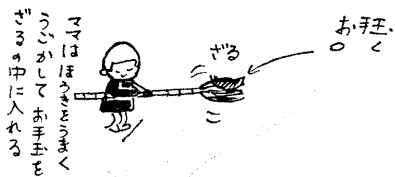
は、母親参観日に子どもの創ったゲームを親子ともにやりました。子どもはもうすでに一度経験済みですから母親がどんなふうにするか興味深くみつめています。母親がうまくいかないと言わぬ拍子で、遊びはコチコチの母親さえもほぐす魔法です。話は戻りますが、「叱られる」は「びっくり」に変

化し創造へと動き出しました。園長先生の話はもう心配無用となりました。

◆「パパはおひるねさ」

幼稚園の中で特に人気のある遊びの中に、椅子とり遊びがあります。

子どもの人数よりも一つ椅子を少なくして行なう遊びですが、椅子のまわりをピアノに合わせて歩き、途中で音楽がやんだ時や「ボン」という音で早く椅子にすわります。もしもすわれなかつたら抜けて行きます。そして最後にはたった一人のチャンピオンが決



します。また、フルーツバスケットと呼ばれるものや、「すきやき」という名でも親しまれています。

前はホーキという器材を中心に考えたわけですが、こんどは、「椅子とり」という、遊びの名からくる遊びを考えてみましょう。

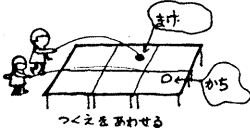
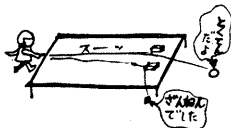
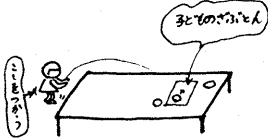

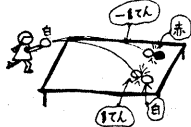
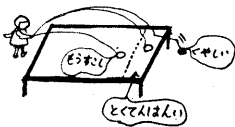
年少児（三歳）では「一匹ぞうさん」の歌を中心にして、先生がまず真中で歌をうたいます。「一匹ゾウさんくもの巣にかかってあそんでおりました、あんまり愉快になったのもひとりおいでとよびました」その時先生は一人の子どもを呼んで「二匹のゾウさん……」と続けていきます。途中でね先生が「さようなら」といったらどこでもいいですからあいている椅子のところへ行ってください」と話をします。こうして先生が中心になって椅子とりが始まりました。三歳児



くらいになると、かなり話の内容が的確につかめるようになってきていますが、全員がそうとは限りません。自分のもってきた椅子が、他の子にすわられてしまい、大声で泣いてしまったこともあります。

また先生が二人いるなら一人は説明しながら子どもを見、ひとりはおオカミになります。一回目の歌の終わりの時に二名になり二回目の歌の時は二人はバラバラになって各々一人ずつつれてきます。二回目には四名、三回目八名、というように倍になっていきますから三十人でしたら五回ほど歌うと全員が、ゾウさんになって円の中を歩くこととなります。この時、おオカミがウオーと吠えます。子どものゾウたちは一目散でどこかあいている家（椅子）へ逃げこみ、おオカミは椅子のまわりを一回ぐるっとまわってから入口に入り、子どものゾウを追いかけます。無事にすわれたらそれでよし、途中でつかまったら、先生といっしょにおオカミをします。

次に先生が「パパはおひるねぎ、おしずかに、声ひそめ、抜き足で、こっそりでかきましょう、ララララララララー」の歌を歌いながら何人かの子どもをひきつけて、こっそり歩きます。途中、先生が「ジリジリジーン」といったら大急ぎで椅子にすわります。パパの歌のころを女の子にかえてやると、女の子は静かに見守り、男の子が抜き足で椅子から離れ

<p>1. どっちがとおい ポイント 2人室内 準備 机、あるいは床に線をひいておく、ひとりにひとつのお手玉</p> <p>すすめ方 1.お手玉をなげて、机のほかに近い方がかち、机からおちたらまけ。 2.かっただものどうして競いチャンピオンをきめる。</p> 	<p>2. この道は細い道 ポイント チーム(2)室内 準備 机、つみ木2こ お手玉 2つ</p> <p>すすめ方 1.チームから、かわるがわる1人でできてする。 2.つみ木の間を、お手玉が通れば1点、ひとり2回ずつで全体の得点をきそう。 3.床においてもできる。</p> 	<p>3. のせろやほい ポイント 5・6人 室内 準備 机、紙、お手玉 4~6個</p> <p>すすめ方 1.ぎぶとんの上ののった、お手玉の数で競争する。</p> 
<p>4. お手玉ボーリング ポイント 2人 室内 準備 机、たおれやすなものふたつ、お手玉をひとつずつ</p> <p>すすめ方 1.お手玉をすべらせてまをたおす。 2.かちぬき戦もおもしろい</p> 	<p>5. あてろ あてろ ポイント チーム(2) 室内 準備 机、赤・白のボール、お手玉ふたつ</p> <p>すすめ方 1.2つのチームからひとつずつかわるがわるです。 2.自分のチームのボールにあたれば1点、反対のボールにあたれば1点ひく 3.チームの点でかちまけをきめる。</p> 	<p>6. ぎりぎりいっぱい ポイント 5・6人~10人 室内(外) 準備 お手玉をひとりにふたつ とくてんはんい をつくっておく</p> <p>すすめ方 1.四角の中にはいれば1点ということで、個人の得点をきそう。 2.これはチームにわかれてもできる、ルールは同じ</p> 

ます。歌が終わったところを見はからって「ジリジリジーン」とやります。まるでハチの巣を突つたように動きまわりの女の子とは対象的になり、とても愉快です。

◆「ほらできた」

遊びをつくり出すことは、こんなに簡単だという例をいくつかあげてみましょう。

幼児の模倣遊びの多くは一番最初に述べてあるような動物の諸動作です。これは人間が普通に歩くのと同じように鳥は飛び、ウサギははね、ゾウはノッシと歩きます。この人間にない動きが遊びのヒントになります。このことは、日常生活の動作、行為に制約を加えてみるのと同じです。

Aは、単なる走りっことです。

BはAに、後向きという条件を入れます。（エビガニの話をしてあげるとよいでしょう）

CはBにがにまたでという条件を入れます。（おサルさんがおどけて走る遊びになります）

このように人間の諸動作に、制約を加えるとバランスがくずれ、やっているものも、見ているものも、大変楽しくなるわけです。これだけでもおもしろいのですが、用具や機会、形式、人数、機能、対象、隊形、動き、場所の条件をうまく

組み合わせたら、何千何百とできるのです。

遊びの苦手な先生も、心配はありません。材料は身近にたくさんあるのですから……。

◆子どものつくった遊び（前頁の図参照）

お手玉六つばかりを使って室でできる遊びを年長児が考えたものです。ありふれていて「ナンダ」と思いうかも知れませんが、狭い室の中で、机を動かさずに、机の上だけを利用し、お手玉の特徴をよく考えてつくったことがよくわかります。先生も子どもと一緒に参加してやってみましょう。時に負けることがありますから、子どもたちは大喜びです。

◆最後に

最後に、現代の幼児教育に欠けているものは一体何であろうかと考えました。極論すれば、遊具も教材も先生も、皆、インスタントで画一的であり、そういう環境の中で、遊びを自分たちの手でつくりだしていくのは、大変でもあるわけですが、「やればできる」ということがインスタントに対しての本当の抵抗であり、そのことに目を向けることによって、私たちは、まだまだたくさんやることがあるのではないでしょうか。

（日本児童遊戯研究所）

八戸市における子どものおそびとその変容

中 谷 喜 久 子



八戸市の地理的、風土的環境

私どもの住んでいる青森県は東北地方の北の端にあり「みちのく」と呼ばれている。昔は「陸奥」といわれていたように中央から非常に遠い存在で、交通や気候に恵まれない東北の辺地・文化の果つる地とされてきた。青森県の東南にある八戸市は今日でこそ人口二十一万、新産業都市にも指定され、水揚げ全国一、二位を競っている八戸港を持ち、工業の町・漁業の町として知られるようになったのであるが、しかし、

・江戸時代に盛岡南部氏十万石のうち二万石を分け与えられ八戸藩ができた

・明治四年、廢藩置県により八戸県となった

・明治二十三年、八戸町となった

・昭和四年、市制になった頃は人口五万

という、昔は小さな静かな城下町だったらしい。

わが国の一般的な気候に比べると、冷涼で短い夏、寒気の厳しく長い冬であり、冷害による大凶作に見舞われたことがたびたびあった。子どもの頃よく「南部の殿さまアワめしヒエめし、のーどにひっからまーるほしなじるほしなじる」と意味もわからずにと歌ったものであったが、今になってよく考えると極端に貧しいくらしをしていた八戸地方の人々（南部人）を揶揄したことばであったことがよくわかる。昭和十一年頃も子どもたちは男の子はつそでの着物を着て、女の子は縞や矢がすりの着物を着、げたやぞうりをはいて小学校へいっていたということである。

古くからの町ではあったが、八戸弁は今日では工業の発達に伴う人口の増加とテレビの普及とともに姿を消しつつある。子どもたちに八戸弁で何かいうとおかしいといって笑ったり、意味が通じなかったりすることが多い。遊びにしても八戸弁と同様に次々

と忘れられていき、全国的に同じことば、同じ遊び方のものが多くなってきたように思われるのである。

四月 からっ風が砂ぼこりを舞い上げる。

梅と桃と桜がいっしょに咲いて四月下旬からお花見のシーズンとなる。

八月 平均気温二十二度、旧盆の頃から秋風が吹きはじめる。

十月 秋が短くお彼岸が過ぎると寒くなる。

二月 平均気温マイナス一度、雪は少なく乾燥し、海からの冷たい風が吹きつけ、いわゆるシバレル(凍る)日が続く。

このような八戸の町において二十年前の子どものあそび(五、六歳から小学六年頃までに遊んだ)が現在ではどのように保存されるように変容されてきているか、またその原因について調べてみることにした。

方法

①筆者が子どもの頃に(昭和二十年～二十七年)遊んだあそびをできるだけ思い出して、その呼名・遊び方・遊びに伴う歌・ことば等をあげ(イロハ……)その一つ一つについて②現在中学三年生、女三名に彼女たちが子どもの頃(昭和三十五年～四十一年)に、イロハについてはどうだったか、また遊び仲間について、遊び場所について聞く。次に③現在小学三、四、五年生男一、女八のグループに同じように、加えてどんな遊びをしているかを聞

く。④幼稚園年長児(六〇名)の自然発生的あそびの中にイロハ……について調べ、保育者が保育にとり上げているとすればその目的や方法について、⑤八戸地方では冬二月になると豊年を祈って郷土芸能である無形文化財指定の「えんぶり」祭りはじまるのであるが、このお祭りに対する子どもたちの興味や関心のようなものを①～④について調べることにした。

① 昭和二十年～二十七年頃の子どもの遊び

イ おはじき

ガラス製で、透明なものと乳白色模様入りのものがあつた。

ロ だまっこ(お手玉のこと)

まくら玉とはぎ玉の二種類があつた。五コが一組となつていて、その中の自分の気に入りの玉を「親玉」といつた。同じ一組を使って三人で遊んでもそれぞれ親玉の異なることがあつた。

・だまっこあそびのうた

「おひとつ おひとつお二つ お二つお二つお三つ おお三つ
おおみんな おおみんな おってんちよくんな ちよくんな ちよ
うくもはんな はんなもだいやすっこ だいやすっこ だいだいびっ
き びつきもおしやらす おしやらす おしやらすおねがいしよ
おねがいしよ おねもおかいしよ おつかえーし おつかえー
しおつかえもんどし、もーももかーけ ばだばだも一俵 たわら
ん 一俵二俵三俵四俵五俵もつて たわらもうんま ンまも一足

ひとあしたん ふたあしたん みーあしたん、よーあしたん い
ーつもたんたん じじばのっこいよ とつてもとなくとも と
なりのおばさんにいっちょかーした いっちょかーしのおひと
つ」

幼い子やへたな人には、「まねっこ(上にあげた玉を手の甲で
うけてから手のひらにとること)無し」とか、「じじばば(「じ
じばのっこいよ」のところから片手で二個を交互に上に上げて
続ける)無し」といって仲間に入れた。一ちようあがると同じう
たで仕方を覚えて「ちやくちやく」「三つちやくちやく」「左手
で」と続けた、技術の高度さを要求した。

ハ まりつき

・まりつきのうた

1 一文目のいーすけさん いも買いに走ってなかぎとサッサ
二文目のいーすけさん にんじん買いに走ってなかぎとサッサ
三文目のさんすけさん さとう買いに走ってなかぎとサッサ
四文目のよんすけさん 塩買いに走ってなかぎとサッサ
五文目のごんすけさん ごぼう買いに走ってなかぎとサッサ
六文目のろくすけさん ろうそく買いに走ってなかぎとサッサ
七文目のななすけさん なつとう買いに走ってなかぎとサッサ
八文目のはちすけさん ハット買いに走ってなかぎとサッサ
九文目のきゅうすけさん くり買いに走ってなかぎとサッサ
十文目のじゅうすけさん 重箱買いに走ってなかぎとサッサ

一文目ずつつき方がちがった。たとえばグループの中でじょう
ずな人は五文目続き、へたな人は二文目続きなど決めておき、
自分の番でそこまで続くと、その文目以後にカクッテ(まぢがえ
て)も次の順番では続きがやれて、あがる(最後までいくと「あ
がり」といった。その次には、

2 一文目のいーすけさん 一の字が嫌いで 一万一千一百億一斗
一斗一斗まきお倉くらに取とめて二文目にわーたした
二文目のいーすけさん 二の字が嫌いで 二万二千二百億二斗
二斗二斗まきお倉に取めて三文目にわーたした
三文目の三すけさん 三の字が嫌いで 三万三千三百億三斗三
斗三斗まきお倉に取めて四文目にわーたした
四文目の四すけさん 四の字が嫌いで 四万四千四百億四斗四
斗四斗まきお倉に取めて五文目にわーたした
五文目の五すけさん 五の字が嫌いで 五万五千五百億五斗五
斗五斗まきお倉に取めて六文目にわーたした
六文目の六すけさん 六の字が嫌いで 六万六千六百億六斗六
斗六斗まきお倉に取めて七文目にわーたした
七文目の七すけさん 七の字が嫌いで 七万七千七百億七斗七斗
七斗まきお倉に取めて八文目にわーたした
八文目の八すけさん 八の字が嫌いで 八万八千八百億八斗八
斗八斗まきお倉に取めて九文目にわーたした
九文目の九すけさん 九の字が嫌いで 九万九千九百億九斗九

斗九斗まきお倉に収めて十文目にわーたした

十文目の十すけさん 十の字が嫌いで十万十千百億十斗十斗

十斗まきお倉に収めて一文目に渡した

3 一間おき位の間隔で並び、リレー式について渡すうた。

A 「どまいじよまといじよさかтон さいたかтон ひのみがとん とんとこせや とのがみさまは ここはふなばのさかりがとん ひーよ ふーよ みいみがよ いーつむーつ ななやでここのとどう ひとつあなたにかしました はい くれましたおさむらいしはおかぐらはやしで」

「どまいじよまといじよ さかтон さいたかтон」と初めにもどり、いつまでもくり返して歌った。

B 「ぶたさんの 宙がえり 屋根から落ちて 水一升飲んで

おなかはタイコ おしりはラッパ ブカブカ キュッキュツ」

二 なわとび

「ゆうびんやさん おはいんなさい おはいりましたら じゃんけんぼん まけたおかたは おにげなさい」

「大波小波 風吹いた山 郵便配達お困のご用で エッサッサ

さぎ波こいこっばのこ」

「くまさんくまさん手について くまさんくまさんまわれ右 く

まさんくまさん片尾で くまさんくまさんさようなら」

ホ 一段二段（ゴムとび）

ゴムひもを持つ人が、自分の親指と人さし指の幅で地面からひ

ぎ・腰・肩・頭へと一段ずつ高くしていき、みんなはそれを飛びこえたり、大阪とび、さか立ちなどでこえてあそんだ。

へ あやつことり（あやとり）

ト 指あそび

1 お・な・べ・ふ（占って飛ぶ）

相手の手首から肘までの間を「おなべふおなべふ」といいながら左右の親指で交互におさえながら上がっていき肘の関節に、

「お」で止まれば「おとこおなご」（乱暴・きかん坊）

「な」で止まれば「なげつつ」（泣き虫）

「べ」で止まれば「べんきょうか」（頭が良い）

「ふ」で止まれば「ふりょう」（不良）

2 数えうた

一つ二つの赤ちゃん 三つみかんを飲べすぎて 四つ夜中に

はら痛み 五ついつものお医者さん 六つ向かいの看護婦さん

七つなかなか治らない 八つやっぱり治らない 九つこの子は

もうだめだ 十でどうとう死んじやった

チ 歌つきあそび

1 豆っこ煮だが？（豆が煮えましたか？）

「豆っこにえだが さきげっこにえだが ちゅつとくぐれ」

うたに合わせて二人が向き合って、両手をとり左右にふりながらくるっと背中合わせになる、また歌いながらもとにもどる。

2 とんびとんびまわれ（子とろ子とろ）

「とんび とんびまわれ さかなのほね けーぞ」
どうたいながら「子とろ子とろ」のようにしてあそんだ。

3 石きりますか大ますか(じゃんけんあそび)

「石きりますか(グーを出す) 大ますか(パーを出す)

はさみですか(チョキを出す) ピンピンか(親指を立てる)」

たくさんの方でだんだん速度を早めてうたった。

リ パツパ

切手くらい、画用紙の厚さの紙に絵が色刷りしてあった。数名で何枚かずつ出し合い、机の上に並べて、息を勢いよくパツと吹きかけ、札がひっくり返ったら自分のものとなった。

又 パツタ(メンコ)

パツタとも言った。

北斎ふうの武者絵、有名軍人、まんがの主人公の色刷り。

ル ずぐり(こまの一種)

ちようど鶏卵の形の焼きもので、初めは両手でまわし、すぐ五〇〜六〇センチ長さの少し幅のあるひもで地面とずぐりの接触するあたりをたたきながらまわした。

ヲ 陣とり

たいていは電信柱がお互いの陣となった。

ワ かんからふみ(かくれんぼ)

空かん一コを一定の場所に置いておく、誰かがそれを思いきり

遠くへけって逃げ、かくれる。鬼はその空かんをもとへもどしてからでないで隠れている人を捜しに行けず、また捜しに行っている間に空かんをけられたりもした。

カ かごめかごめ

「かごめかごめかごの中の鳥は いついつではる 夜明けのばんに つるとかめとつーべった うしろの正面だれ」

ヨ かけ声

1 「アー イーキッチ キッチ キッチ」といいながら(じゃんけんぽん)(あいこでしょ)(あいこでしょ)とじゃんけんをした。

2 「エッタ」

鬼ごっこなどで相手をつかまえた時にいった。「我得たり」からきていることばであるらしい。

タ はやしことば

1 「おどごどおなごどちようせんこ あまりちようせば泣がせんこ」

男の子と女の子が仲良くあそんでいるときにはやししてた。

2 「人まねこまね荒屋のきづね穴はってにげろ」 友だちのまねばかりする人にむかっていった。

3 「見つけものかちかち返すごどでぎね」 他人の落とし物を見つけたときにいった。

「ネコババするぞ」 うっかり落としした人をからかった。

4 「はなくそまるめて万金丹 それを喰うやつアあんぼん丹」
鼻をいじっている人に向かっていた。

5 「もち米あひなアせ、うる米あひなアせ」

つかまえたどんぼが指にはさまれたまま卵を産んでいる時に、
「もっともっと産むように」という気持ちをかめていった。

6 「松になれ 杉になれ。松になれ、杉になれ」

線香花火をしている時に必ずとなえた。

レ 雪なげ

ソ そりすべり

ツ かねげたすべり(げたスケート)

かねげた。

齒のないげたの台にスベリガネを取り付け鼻緒やつま革をつけた。スベリガネの幅は一分、二分、三分とあり、幼児は、幅の広いものを取り付けていた。路上の固まった雪の上や凍った雪の上ですべて遊んだ。小走りで勢いをつけてすべり両足をひらいて平行に、あるいは足を前後において滑った跡の線が一本になると上手であった。一定の距離を走り、誰が長くきれいに跡をつけてすべるかを競ったものだった。

ネ コーラスケート(すべりげたスケート)

コーラスケート

朴齒の齒のないようなげたの台に今のスピード靴に取り付けるような高さの鉄製のスベリガネをつけ、太い鼻緒に長いひもで台

と足を固定した。かねげたは主に幼児・低学年・女の子のものでコーラスケートは主に高学年の男の子のものであった。

凍った雪の上ですべった、気温の低い日や夜に道路に水をまいておき、朝とか夕方などにかねげたよりはずとずと速いスピードを出してすべったものだった。

② 昭和三十五年〜四十一年頃

イ おはじき

大いに遊んだ。ガラス製のまるいものと、花型をしたもの。

ロ だまつこ

「お手玉」と呼び、持っている人もいたが、あまり遊ばなかった。「うた」は知らない

ハ まりつき

よく遊んだ。遊び方と遊びの歌は1の短い方を知っていた。3のAは全く知らない。Bは遊んだとのこと。

ニ なわとび

「ゆうびんやさん」「くまさんくまさん」「大波小波」等同じようであった。

ホ ゴムとび 大いに遊んだ。

へ あやつことり 「あやとり」といった。

ト 指あそび

1 お、な、べ、ふは知らず、同じ遊び方で「貧乏・金持」

2 数えうた（一つ二つの赤ちゃん）

同じことばで遊んでいたようだ。

チ 1 「豆っこ煮だか」は知らない。

2 「大根とり」といって同じようにして遊んだ。

3 知らない。

リ 主に男子のみ遊んでいた。

又 主に男の子のみ遊んでいた。

ル 全く知らない。

ヲ 同じ呼名「陣とり」であるが、地面に枠をかくてその内側を

陣とりしていった。

ワ 遊んだ

カ 遊んだ

ヨ 1 「オー エス キ」といった。主に男の子。

女の子は「じゃんけんぽん」といった。

2 「ケタ」「ケッタ」ともいった。

タ はやしことばは4のみ。あとは知らない。

レ 遊んだ。

ソ 遊んだ。

ツ 実物は知っているがあまり遊ばなかった。

ネ 知らない。

③ 昭和三十九年～四十五年頃

イ ガラス製のもの、花型をしたものがあり、よくあそんでいる。

ロ お手玉

うたは全くうたわれない。遊び方は1の簡単な方だけである。

ハ まりつき

1のうたと遊び方のみ、

2・3のA・Bは全く知らない。

ニ なわとび 「大波小波」「ゆうびんやさん」「くまさんくまさん」など。

ホ ゴムとび 「一段、二段」「英語飛び」「いろはにほへと」

へ あやとり 遊んでいる。ただしむずかしいのはできない。

ト 指あそび 知らない。ただしちがう占い方がある。

○ド・レ・ミ

○ド・レ・ミ

名前に合わせてド・レ・ミ、ド・レ・ミと教えていく。ドは

独身、レは恋愛、ミは見合い。

名前を親指の方からいい、そのところまで

「天国地獄、てんごくじごく」という。死

んだ後の行先きを占う。

○同じように「けいさつ、どろぼう」

○自分の名前と相手の名前を（または男の子と女の子の名前）

書き出し、母音をしらべ、あいうえおの数字を書きこみ、同

じ数字の多い方が「仲が良い」



○一つ二つはいいけれど 三つみごとにはげがある 四つよこにもはげがある 五ついっぱいにはげがある 六つむこうにはげがある 七つななめにはげがある 八つやっぱりはげがある 九つここにもはげがある 十でとうとうてらっぱげ(ぜんぶはげの意)

チ 歌つきあそび

1・2・3は知らない。

3と同じ遊び方で、

「じゃんけんほかほかほかいかいどう あいこで あめりか ようろっぱ」

リ バツバ

名刺ほどの大きさの「写真バ」、牛乳びんのふたなどであそんだことがあるが、学校から不潔の理由で禁止になってからは遊ばない。

ヌ バツタ

主に男の子のみ、有名野球選手、まんがの主人公が印刷。

ル ずぐり 知らない。

ワ 陣とり あまり遊ばない。

カ 「かごめかごめ」 「ことしのぼたん」 「花いちもんめ」 「煮

たつた煮たつた」

セッセッセでは「アルプス二万尺」 「みかんの花」 「汽車」 「桃

太郎」 「浦島太郎」 「茶つみ」

ヨ かけ声

1 「オーエッキ」ともいうが、たいていは「じゃんけんぽん」

2 「タッチ」という。

タ はやしことば

1〜6全く知らない。直接相手に向かつてはやしたてたりはしない。かげ口やあだ名をいうとのこと。

レ 雪なげ 大いにする。

ソ そりあそび あまりしない。

ツ かねげた 全く知らない。

ネ コーラスケート 全く知らない。

○スケート靴を小学校中学年ではクラスで四十名中五、六人持っている。

高学年ではクラス内の男子がほとんど女子の半数が持っている。

中学生ではクラス内のほとんどが持っているとのこと。

仲間関係

・友だちと遊ぶ方が好きである。

・同年齢の人と遊ぶが、同じクラスの人とはよく遊ぶし、時間が

長い。

・年齢がちがうと、年下は「相手くさい」「泣やすい」ので

年上だと「文句をいわれたりする」から

あまり遊ばないとのこと。

・家にいる時は、

テレビを見る、マンガ本を見る、読物を読む、絵をかく、ファッションノート（ぬりえ）で遊ぶ、リアンを編む、高学年では簡単なあみものをする等（女子）のようである。

八戸弁について

学校では共通語を話すように指導している、遊びに夢中になると八戸弁がでてくる、友だちの間では使っている、しかし八戸弁はきたないことばであり良くないと思う、先生に話す時はきちんとしたことばで言っている、家庭でも八戸弁的な共通語ではあるがあまり苦労しないで話している、とのことであった。

④ 幼稚園年長児では

自然発生的あそびにおいては、

ロ お手玉 時々誰かが持ってくる投げたりとったりして遊ぶ。

歌は全く知らない。

ハ まりつき

1のうたはよくうたってあそんでいる。

2・3のA・Bは知らない。

ニ なわとび

よくとべなくても「ゆうびんやさん」「たわらのねずみ」の歌は知っている。

ホ ゴムとび

○一段、二段。

○いろはにはへなどをしている。

へ あやとり

あやとりのできる子はほんの少しの女兒のみ。

ト 指あそび

○「つねこさんが階段のぼってこちょこちょ」

2 数えうた 見られない。

チ 1〜3 見られない。

リ パツパ 見られない。

ヌ パツタ 折紙で折って作ったりする。園には玩具類持ち込み

禁止である。

ル ズグリ

ヲ 陣とり 見られない。

ワ かんからふみ 見られない。

○くつかくしをする。

カ 「かごめかごめ」「ことしのぼたん」「煮たった煮だった」

「いべいさんがいも切って」

ヨ かけ声

1 「じゃんけんぽん」

2 「タッチ」

○トランポリンで順番を交代するのに、野球ケンで「ララララ

ラーア ララララー ラーララ ラララ ララララー ア
ウト・セーフ・ヨヨイのヨイ」でジャンケンをして代わるのが
一年ほど続いた。今学期になってからは見られなくなった。
タ はやしことば

1) 6は全く見られない。

。「指切りげんまうそついたら針千本のます」

レ 雪なげ 主に三学期に大にする。

ソ そりすべりはしない、園にそりがないため。

ツ 全くなし。

ネ 全くなし。

。ただし竹スキーであそぶ。

保育にとり入れる場合はほとんど遊びの中であるが、伝承的
なもの、八戸地方独特の遊びという意識ではなしに現在子どもた
ちがあそんでいる遊びをとり上げることがほとんど。

「豆っこ煮だが……」はとても喜こんで年少児も喜こんでするの
で一斉保育の時にたびたびうたってあそぶ。ただし「まめっこに
えだが」と濁っては言わず、また「ちゅっとくぐれ」も「くるっ
とくぐれ」と教師が言い直した。

「とんびとんびまわれ」も好んで遊ぶが、教師自身歌の中に八戸
弁が直接でてくるとこのまま歌っていいかと思ったりもする。

⑤ 「えんぶり祭」について

約八百年ほど前から八戸地方に伝わっている郷土芸能で十八年

前に無形文化財に指定されたものである。馬の頭を象徴したえぼ
しをかぶり（太夫）、太鼓、笛、テビラ金（ペーシンバルに似
ている）をならしのぼりを立てて家々をまわる。二月といえは、
八戸はまだ冬の真最中であるが、新春にあたりこの年の豊年を祈
って寒気を打ちほらい、降る雪の中をえんぶり組がやってくる。

I 私どもの幼い頃には遠くからおはやしの音が聞こえてくると
急いで外に出て、えんぶりのする（おどる）のをいつまでも
見物していたものだった。えんぶりがすっている家の前は道
幅をうずめるような人ばかりだった。

II 中学三年女子三名

関心なし 「あ、やってるな」程度のこと。

III 小学三、四、五年生 女八男一名。

。あまり興味なし

。学校で説明をしてくれるとその時はおもしろいと思う。

。門付けとか近くの家です。っていてもそんなに見たいとは思わ
ないとのこと。

IV 毎年幼稚園では、二月が来てえんぶりの日がやってくるとえ
ぼし作りをする。ペーシンバルやトライアングル、手ぬぐ
いと、まわりにあるものをもってえんぶりのあそびをする。
変容の形とその原因について

I 形、遊びに伴ううた、かけ声、ことばがほとんど失なわれてし

まった。(例ロだまっこ ハまりつき 2・3のA・B ト指あ

そび チの1・2・3 ヨの1・2)

2遊びの仕方がなくなった(例ロの複雑型 ハの1の2)

3遊びそのものがなくなった(例リ、ル、ツ、ネ)

4遊びに伴ううた かけ声、ことばが変わってきた(例トの1

トの2 チの3 カ)

5遊ぶ方法が変わってきた(例ト)

6新しく遊ばれている、うたわれている。(例ホ、ト、チ、カの

ことしのぼたん セッセッセ 煮たった煮たった スケート

サッカー)

7同じように今でも遊んでいる(例ハのB ニ)

原因と思われる事柄

1について 昔から漁業が盛んであり他県との交流のあったこ

と、工業の発展に伴い特に人口が増加し、土地の子どもたちは

影響されて、また共通語への指導のためもあって、ほとんど共

通語を理解し、話していることなどにより、八戸弁がだんだん

姿を消しているからではないだろうか。

2について 昔はグループの中に年齢の幅があり、幼い子は「あ

まちゃっこ」と称して遊びの仲間に入れてもらえた。

近年では同年齢、しかも同じクラスの子と遊ぶことが好まれて

いる。交通ははげしく、外遊びの場所が制限されている等か

ら、遊びの技術、複雑なルールなどの伝承がなされていないの

ではないか。

3について 子どもたちがげたをはかなくなった、道道で遊べな

くなった、スピード靴が普及し始めた。

4について 八戸弁でのものがなくなり、代わって今風なものが

とり入れられるようになった。

5・6について 他地方から移住してきた子どもから教えられ

る、テレビから遊び方をおぼえる等によるものであろう。

7について 共通語でうたわれていたからと思われる。八戸弁で

語られ、八戸弁で歌われ、独自の玩具を持ち、また独特な遊び方

をする、そして長い年月伝えられてきた——そのようなあそびが

「八戸地方の伝統的なあそび」というならば、それはもう姿を消

そうとしている。または新しい遊びに変わってきているといえる

のではないだろうか。

八戸地方における明治時代の遊び、大正時代の頃の遊び、昭和

初期頃との比較ができず、単に筆者の周囲のみの小さな調べであ

ったが、八戸弁が使われなくなり、八戸弁の歌がうたわれなくな

り、独自の玩具が見かけられなくなり、全国的な遊びが多くなっ

てきていることを考えると、伝統的な遊びが失われつつあるとい

っても過言ではないだろう。しかしながら広域にわたる正確な調

査ではないので、まだまだ知られていない古くからのあそびが、

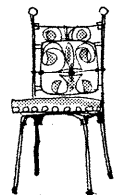
ひっそりと残っていて昔々の八戸人の心を伝えているにちがいな

(八戸小中野幼稚園)

伝統的なあそび——行事など

幼稚園生活の中の問題点

幸 田 素 子



「幼稚園における行事など伝統的なあそびの持つ問題点について」とのテーマをいただいで、少ない経験の私にとっては、昨年一年間を今あらためて思い起こし、頭の中で自分なりに整理をつけている次第です。

私たちには、教育実習生として公私立の幼稚園で勉強した短い期間と、教師として勤めるようになって約一年半の経験しかありません。きわめて少ない経験の中で、行事を、あるいは保育全体を誤った方向で見てしまっているのではないかといった不安もあります。

先輩の先生方にご指導していただいたり、時には学生時代の書物をひっぱり出したり、また同輩の者同士で集まって、なやみを話し、お互いに意見をのべあったりしています。

その話し合いの中に、一番多くみられるのが、教師としての私たちをなやませる、教師の気になる幼児の問題と、園における行事の問題です。

◆各園さまざまな行事

一つの行事をとりあげてみても、その地域性、公私立の違い、各園の伝統などで、いろいろと相違があります。

幼稚園の行事が、その地域のひとつのお祭りのようにとりあげられているような農村地帯。だんだん、昔からの素朴な行事が変えられ、忙がしい生活に情緒的なものまでも奪われそうになっている都市の幼児たち。

創立の古い伝統的な幼稚園になればなるほど、行事は、こみいり派手に行なわれるような気がします。行事が、しっかりと根をおろして、その園の特色にまでなっているとさえ考えられるところもあります。

新しく勤めたばかりの教師は、その園の教育方針、特色などを早く理解し、自分のものにして、幼児教育にたずさわるのがよいでしょう。しかし勤めて間もない私たちには、幼児との毎日の

生活があります。その中で私たち自身が望む教育的なものも多分にあります。私たちの未熟なやり方で失敗や反省を重ねながらも、幼児とともに成長していく毎日の大切な保育があるのです。そして、そのカリキュラムに大きな部分を占めているのが行事ではないかと思われまます。

私は去年一年間、はじめての幼稚園教師としての経験に、行事については特に、指導していく立場よりも、むしろ先輩の先生方に導かれて、園児の一員になったつもりで行事をうけとめてきました。

さいわい、私の勤める幼稚園は、公立でもありますし、去年新設されたものですから、伝統といったものは、全くありません。ですから、私も負担をあまり感じることなく、自分のやり方で少しずつ行事にとりくめたことを、うれしく思っています。

行事のもつ本来の意味を全く改革するわけにはいきませんが、幼児にとって、行事を、できるだけ楽しい幼稚園での思い出にしてやりたいと思いました。

毎年くりかえされる行事、長い間伝統としてうけつがれてきた行事を、幼児は、日本人としても、社会でも、また家庭でもうけとるでしょう。しかし、その行事を、年間をとおして幼児の活動としてとりいれ、その時期の幼児の発達にみあった内容にしてとりあげていく、という方針を、先輩の先生方に話していただきま

した。

当園は地域としても、新興住宅地であることから、古くからの家風や、祖父母の昔話、伝統的な行事についても、あまりふれることなく、若い両親に育てられている幼児が多いようにみうけられます。ですから、幼稚園で行なう行事は、幼児の情操面を育てるのに役だつものでありたいのです。

このようにして一応の方針のもとに指導をうけながら、とりくんだ昨年の行事でしたが、行事の前の「うちあわせ」において、十分に理解できなかったり、また誤まって解釈して、多くの失敗を残しました。

ここに二つの実践をあげてみました。私が、はじめて教師としてとりくんだ「子どもの日」と、一年間のしめくくりともいべき、「発表会」です。「子どもの日」は教師も、幼児もはじめてという中に、製作という、かなり高い要求を入園当初の幼児にしたことを反省しています。また「発表会」も卒業まじかな幼児とはいえ、ほとんど教師から一方的に与えてしまい、「見せる行事」にしてしまったような気がします。

そこでこれらをとりあげて、再び反省することによって、行事のもつ問題を考えていきたいと思います。

◆二つの実践から

子どもの日

四月下旬、幼稚園に入園して、ようやくなればじめたばかりの幼児たち。お友だちをみつめて、いっしょうけんめいに遊ぶ幼児、まだひとりではんやりと人のすることをしている幼児、園庭でかけまわっている幼児、部屋で静かに絵本を見たり絵をかき幼児、教師の後からついてまわる幼児。

しかし四月も残りすくなくなると、緊張もようやくほぐれてきたようです。

職員室での話し合いの中心は、「子どもの日」のもち方についてです。新設園なので設備も整わず、五月人形、鯉のぼりはありません。どこの家でも、そろそろ鯉のぼりがたてられている頃でしょう。さわやかな五月の風とともに幼児は、「子どもの日」の近いことを感じているかもしれません。

開園はじめての行事でもありませんから、先生方の今までの経験をお話しあつて、この地域の幼児にあつた「子どもの日」にし、伝統的な面からもまた幼児を楽しませるということで、鯉のぼりを製作させることになりました。

白いプラスチックの棒六十センチぐらいの先に黄色い玉がつい

たサオを、とりそろえました。そこに、吹きながし、まごい、ひごいをつけます。吹きながしは、白画用紙八ツ切りを細く切つたのを台紙にして、そこへ色紙八ツ切りを同じく細く切つたのを、七色、順番にならべてはっていき、最後に丸くとじます。色の順番は、ひとりひとりの幼児が自由にすることも、はしから、きちんとはれるかどうか、相当話し合いました。そこはひとりひとりの幼児の活動をみて指導していくということで、かなり立派な吹きながしに、なりそうでした。まごい、ひごいは、色画用紙の黒と赤を一枚ずつ使って、たてに半分折つた大ききなので五十センチぐらいはあります。口のところは、糸はりがねをつけるので二重にし、しっぽはハサミで切り、うろこはバスで自由にかくことにしました。

団地なので本物の鯉のぼりが少なく、どうやらサオにつける順番も、はっきり知らない幼児が多いようです。そこで、まず幼児に鯉のぼりを認識させることに重点をおくことにしました。四月二十日頃から、準備を始め、二十五日すぎに、まず幼児に鯉のぼりのお話から始めました。

「みなさんは、お外で遊んでいる時、高いお空にヒラヒラしているきれいなもの、何か見たことありませんか」と問いかけてみました。すると「雲」、「鳥」全く予想外の答えがえってきました。驚いて、「キレイでできていてね。たくさん泳いでいる

ものよ」すると、次々に「コイノボリ」「こいのぼり——」と言いだしました。私は、ほっとして、そこから鯉のぼりの名前を、「カザグルマ」「ヒゴイ」「マゴイ」などと尋ねたりして、話を発展させていきました。

「幼稚園には鯉のぼりがないのよ。だから大きな鯉のぼりを、みんなで作ってみましょう。もし、じょうずにできたら、お部屋に飾って、それからみんなも、ひとりずつ作って、お家にもって帰って、お部屋に飾るといいわね」

自分で作って家へもって帰れるということが幼児の興味をめぐめさせたいのです。

みんなニコニコしていました。そして、「鯉のぼり」の歌をうたいました。

次の日から、およそ二日ぐらいの予定で、共同の鯉のぼりをつくりはじめることにしました。

いつも教師のまわりにくっついてある女の子三、四人を誘ってみました。おとなりの先生のなさっているのを見せてもらい、昨日準備しておいた色紙を手でちぎって、大きな模造紙の鯉にうろことしてつけさせました。

ハサミで切ったり、バステルでかくよりも、のりで平面的につけるのが一番抵抗なく製作にはいれると思ったからでした。入れかわり、たちかわり、十人ずつぐらいがつけ始め、混雑するほど

でした。

「あつこの辺が少しはれていないわね。こども、つけてちょうだい」などと言いながら、ようやく二日で、予定どおりでした。が、クラス用の鯉のぼりは完成しました。

さらに次の日「先生、きょうは何するの」と、鯉のぼりに必死になっている教師の顔色を見ぬいて同情してくれるかのように、幼児の方から問いかけてくれて、さっそく、五、六人の幼児から、各自の鯉のぼり製作が始まりました。

五、六人が十人、二十人と、いつのまにか全員が机にのり、ハサミ、バステルをもち出していました。グループで少しずつ指導していかうと考えていたのに、一斉的になってしまいました。

「先生、つくりたい」「どこにすわるの」とたずねる幼児に、「順番にしましょう」と、とめるわけにもいかず、次々とつくりはじめたら、どうしたらよいのかまごまごして、てんてこまいするばかりです。ほとんど全員で、あつというまに、つくってしまいました。まごい、ひごいで二日ほどかかりました。

吹きながしは、はじめての父兄参観日に一斉的に指導しようとして、未熟ながらも計画してみました。父兄の前で、緊張する私にあつちからもこつちからも、「先生、わからない」「先生、のりがない」「先生、紙が、どこかへいっちゃった」「これでいい、先生」と声がかかります。私は声をからしながら説明し、幼児の間を

あっちへ、こっちへ、オロオロしたのを今だにはずかしく、汗の出る思いです。

吹きながしを、はしからのりではれない幼児、バラバラとはずれてくる幼児もいました。鯉の目玉は、教師が切っておいた金と黒の色紙をはらせました。うろこはバステルを使って、白で自由に描きました。きれいなものをかいた幼児もいましたが、いくら教師が誘いかけても、なかなか腕を動かすもおっくうそうな幼児もいました。鯉のしっぽもどんとん切りすぎて、半分ぐらいの長さになってしまったのもありました。

鯉のぼりが完成して、家へもち帰った後、「はたして、この時期の幼児全員には、無理な製作ではなかったか」とか、「幼児は、本当に喜んでつくったのか」などと反省してみる余裕は私には全くありませんでした。無事、どうやら鯉のぼり製作を終えて、「ほっとした」というところでした。

うちあわせの時に話になかった鯉のぼりの目玉が、想像以上にクラスごとに違っていたり、指導上の細かいことは別にしても、もうすこし聞いておけばよかったです。反省する点が次々あらわれ、他のクラスの鯉のぼりが、立派に見えたものでした。鯉のぼりの目玉については、来年は、やはり家へもち帰るものは、そろえる意味からも検討することになりました。

「子どもの日」のもち方については、鯉のぼり製作を活動として

とりあげたことは、幼児が「子どもの日」を楽しみに待つことからも、よかったのではないかということになりました。ただし来年は、製作期間に余裕をもたせて、ひとりひとりの幼児の発達にあわせて、少しでも無理のない指導にしようと思合いました。

発表会

三学期なれば、当幼稚園では、幼稚園生活のしめくりともいえるべく、父兄を幼稚園に招いて生活発表を行ないます。

いわゆる、「おゆうぎ会」「学芸会」です。一学期、二学期と、ともにすごしてきた幼児たちは、クラスのみとまりもよく、教師の要求に、かなりの程度までついてきてくれます。

今まで自分かたつな行動をしていた幼児も、集団行動ができるようになりました。クラス全体でのフォークダンスも、劇あそびも、まとまってよくできます。しかし発表会は、以前からも聞いていましたが、私が最も心配していた行事でした。「うちあわせ」では、発表会を、どうとりくむか、話していただきました。

特に劇あそびについては、劇あそびは、幼児の発達からみた一年間の総合的な活動のまとめとして、ふだんの保育の延長として発展させること。三学期でもあるので、初期の行事のように地域性を第一に考慮にいれず、園からの行事として園の方針のもとに行なうことになりました。しかし一年目の私にとっては、まだ十

分に幼児の姿をとらせることもできず、ふだんの保育の延長として無理のない活動にもっていくには、かなりむずかしいことでした。

頭の中に方針や教育的意義をいれていても、実際に幼児を目の前にすると、とまどいました。特にこまったのは「劇あそび」でした。「劇あそび」は、部屋で遊ぶときには、楽しくあれば、たとえ脱線しても、せりふや動作をうまくいえなくても、みんな教えてあげたりできますし、またうまくいかず笑ったりしても、幼児が喜んで活動できればよいはずです。

しかし「発表会」として父兄の前で演じさせるには、やはり、幼児ですから、失敗もほほえましく思えるでしょうが、教師として、ある種の緊張と心がまえが知らず知らずできてしまい、「さあどうしよう」ということになってしまふのです。

「劇あそび」——確かに、学生時代、本で見たことばであるし、講義もうけました。しかし、私の不勉強のためか、実際、いかにして劇あそびをやらせたらよいか、わかりませんでした。

こればかりは、本を読むだけで理解でき、指導できるといふものではありません。しかも、「発表会」での劇あそびは、「劇あそび」というよりも、五歳児においては、現実化の方向をたどり、ごっこから完全に「劇」に近い方向でなくては満足できなくなりつつあるのです。

私の劇あそびにおける経験は、ただ一度、ある幼稚園ですばらしい劇あそびを見学したにすぎません。それも完成したものをみただけですから、どのようにして導入されたのか、またどうすれば、あのように幼児のひとりひとりが生き生きと参加し、楽しいようすですすめられるのかわかりません。

劇あそびにとりあげる内容は、幼児が平生からよく知っていて、好きなお話でなければなりません。そこで幼児にお話をした時、いちばん喜んで聞いてくれて、くりかえしお話をしてくれと言われた（入園当初、幼児の心をほぐす意味からも、また、「おむすびころりん」をとりあげました）

「おむすびころりん」をとりあげました。クラスの人数が四十名ちかくいるので、全員参加するのは無理です。各クラス、劇あそびは二つすることになりました。それも、ひとつの劇に約二十人余り参加させなければなりません。みんな、そろって楽しく参加させるためにも、原作にはない役までつくったり、サルや小鳥、リスと動物をふやしたり、ネズミの数を多くしたり苦労しました。

毎日連絡して練習しました。一日でもやめると、次の日、忘れてしまふと思ったからです。でもあとから考えると教師のあせりがあったためと思いますが、問題があるようです。ただくりかえしの練習は、かえって幼児の興味を失なうのではないか、一日の

練習量はできるだけすくなくと一日一回の練習にしました。ひとつの劇、約三十分。だんだんじょうずになってきて、二十分ぐらいにまでなりました。ほめてあげたり、しかったり。発表会が近づくとつれて、私はますますあせりはじめ、日に日に、こわい先生になっていくのを感じました。本当に愚かなことと、はずかしく思います。

幼児たちは、未熟な教師によくついてきてくれましたが、楽しいはずの行事が、苦しみになったのではないのでしょうか。行事のもつ、教師から与えるものという観念を、若い未熟さが、行事をますます悪い方向へ追いやり、それを一方的に幼児に与えてしまったのです。私は先輩の先生に、できるだけ近づこうと、差をせばめようと、いっしょうけんめいでした。

何のための発表会なのでしょうか。

先輩の先生方は、無理なく幼児を楽しませながら劇あそびらしく、伸び伸びとさせていらっしやいました。三つのクラスが一度に見せあった時ほど、自分のクラスのまずさを感じさせられたことはありません。しかし幼児を中心とした発表会のはずです。

教師を満足させるための、父兄に見せるための発表会ではないでしょう。私は教師としても誤った見方で発表会を見てしまったのでしょうか。——私だけではなかつたようです。父兄の中にも発表会という行事を誤って期待したようすがみられました。

配役を決める時でした。教師として、幼児の望む役をひとりひとりの幼児が、なるべく満足のいくようにしてやりたかつたのです。そこで、ある程度こちらからも、その幼児にやれるかどうかと考へたうえでしたが、クラス全体で誰が何をするとよいか、自分は何になりたいのか意見をのべあつて相談して決めました。ところがその日、欠席がちのA君が忘れられていて、後で残つた役を決めました。A君は、気の弱い男の子なので、不満があつても言えなかつたのでしょうか。テレながら、ふざけながらも、うれしそうに？ やつてくれました。

それは発表会が終わつたあとで、その父兄から直接相談されたことですが、本当に、驚くとともに、よい勉強になりました。

その時は、もうすっかり理解しておられ、親としてはずかしかつたと言つていましたが、A君は、母親がガツカリすると心配したらしいのです。発表会がすんで家へ帰ると、母親の顔を見るが早いか「お母さん、ごめんね」と言つたそうです。

そう言わたのは、子どもに誤つた期待をかけた微妙な親心と、さらに、そのような、気持を起こさせた「発表会」という行事の、古くからの観念に問題があるのです。

「お母さんの前で、じょうずに歌えた」「劇が立派にできた」ということで満足していた幼児もいました。

発表会後、今まで自分のすることに自信がもてなくて、どの活

動にも消極的だった幼児が、自信がついて積極的に明るくなりました。「センセイ」と小さな声でしか呼べなかつた幼児が、発表会後は、友だちと、大声で口げんかをしているようすを見て、本当にうれしく思いました。失敗反省をくりかえした行事でしたが、教育者としての喜び、生きがいをも感じました。

幼児にとって無理な発表会であつたかもしれませんが、教育的効果も認められました。地域的なためか、幼児は「発表会」で父兄の前で歌をうたったり合奏したりまた劇をすることを少しははずかしがりませんでした。発表会後、先生方とこのようなことを話し合い、むしろ幼児たちは得意げにさえ見えたことから、来年の発表会は、期間と、その内容を検討しさえすれば、もつとすばらしいものになるのではないかと期待しました。

去年一年をふりかえって、新設園であるという、あわただしさの中で、新しく地域性を理解しつつ、それを生かしながら先生方と、つくりあげてきた行事だつたと思います。行事を望ましい、幼児の豊かな経験として考えるだけでなく、行事には、あくまでも、父兄とのつながりをとり去ることはできません。来年度は、今年以上に幼児の発達を考えた行事にしよう努力するとともに、父兄の啓蒙を、四月入園当初から一年間を通して徐々に行ない、本当の幼児の発達を理解してもらい、ただ表面にあらわれるものだけで幼児を判断しないようにするとともに、幼児の内面の

世界へも入っていきける教師になりたいと思います。

以上のべましたように、私の短い、しかも少ない実践ではありますが、行事は、幼児の楽しみであると同時に、かなりの負担となつて、幼児を苦しめているのではないかと言つても過言ではありません。

毎年くりかえされる行事を、何の不都合も感じないで、ただ受け伝えていくだけの、マンネリズム化した行事になってはいないでしょうか。去年も行なつた行事、そろそろ今年もその時期だから、去年の実践ノートを参考に行なうのではないのです。

もう一度、それぞれの行事を考え直してみるべきなのです。そして、反省し、改めるべきところは毎年でも正しいと思われるように改正されて、それが伝統としてその園にふさわしい行事として伝えられていくべきなのではないでしょうか。

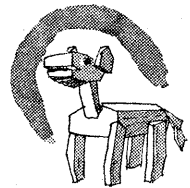
先にも述べましたように、幼稚園における活動、中でも行事は父兄とのつながりが切りはなせません。父兄を満足させる、おみやげの、外面的行事になつていないでしょうか。幼児にとつて、幼稚園でのなつかしい思い出として、いつまでも心に残る行事にしていきたいと思つています。現在の幼稚園において、経験年数の多い先生方と、私たちの指導力の差が、一番はつきりと大きく現われるのが、この行事なのですから。

(四日市市立高花平幼稚園)

行為をのばす集団活動

— 肢体不自由児の保育のために —

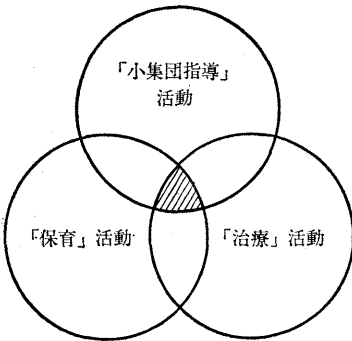
武藤安子



△ 幼児の集団活動について △

子ども（幼児）が、発達の、体験的意義をもとめて、あたらしい集団活動に参加する機会をもつ時、それは幼稚園、保育園であったり、小グループであったり、治療グループであったりするが、そこには「指導目標」というようなものがある。子ども（幼児）の集団活動を、指導目標のちがいによって分けるとすれば、次の三つがある。

保育活動は、一般に、幼児集団保育ということばと対応してとらえることができ、集団的課題に即した「保育目標」をもつ。治療活動は、医療が優先しての治療とは異なる意味の、児童臨床を



基盤とする活動のことであり、子どもと他者（人、もの）との関係の発展に即した「治療目標」をもつ。

小集団指導活動は、子どもの自発的なあり方をのびしながら、

その活動のめざす方向が操作される活動であり、操作技法に即した「小集団指導目標」がある。

指導目標は、子どもたちの、発達の、体験的必要性と指導者によってとらえられるところの、活動のめざす方向によって

規定されるか、ある場合には、三つの指導目標が同時に展開しながら、集団活動が行なわれることが必要である。

三つの指導目標が展開する中で、すなわち、三つの円の交差領域に対応する活動において、いわゆる肢体不自由児など、特殊な条件をそなえている子どもたちがいる集団活動のあり方を考えることが大切である。

△子どもの活動における行為の意味▽

子どもの活動は、行為から成りたっている。子どもは、行為をとおして自己を表現し、他者を理解する。そして、行為するそのことが、子どもがのぞましい生活態度を身につけ、さらにあたらしくしていく過程でもある。

「肢体不自由児」といわれる子どもたちが、集団活動において問題になるとしたら、この行為の次元においてであろう。そこで、子どもの活動における行為の意味を考え、行為をのびず集団活動のあり方について考えたいと思う。

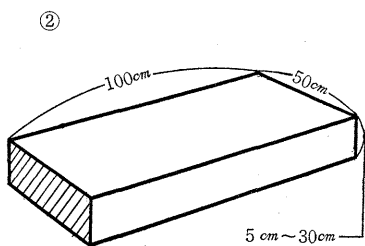
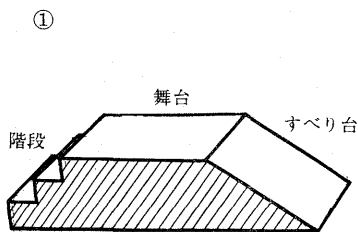
△行為の可能性をのびす▽

「行為は、二つの基礎的な条件によって成立している。つまり、子どもの力と環境の条件である(1)」「行為が成立するための人(子ども)の力は、少なくとも人(子ども)がそれをするところが可能であるかどうか、および人(子ども)がそれをやろうとしているかどうか(依存している?)」それをするのが可能かどうか、つまり、行為の可能性を規定する条件のひとつに、身体的条件(あるいは身体的能力)がある。

子どもの活動を、この身体的条件にとらわれた見方をすると、より速く、より遠く、より高く、より広くふるまうことが大切とされ、それにとりなって、よくできるもの、できないものというような評価が、活動の中に生まれることになる。行為の可能性は、環境の条件や、まわりの働きかけなどが、その能力に適したものであるかどうかによって異なる。行為の可能性は環境の条件や働きかけの変化するものである。

しかし、それらの条件や働きかけがとらえにくかったり、能力を固定的なものとしてみると、行為の可能性は、低く、固定的なものとして評価され、あたかも、子ども全体の可能性についての評価のようにさえ、うけとられがちである。たとえば、肢体不自由児ということばがあるように。環境の条件や、まわりの働きかけの変化によって行為の可能性がのびていき、そのことが、身体

的条件や能力の発達を促進する、そのような集団活動が、用意されることのできたい。



・行為の可能性をのばすのに役だつと思われる用具（環境の条件）の例を、私の体験(3)の中からあげよう。

①は、歩行訓練用を目的とする設備である。舞台の上には、子どもが五、六人乗れる大きさのものであり、周囲には手すりがある。子どもの行為が、階段、舞台、すべり台と変化し、「お山へいこう」とか、「モノレールにのろう」など、活動の目標にも通路にもなる。子どもが舞台の上で、動物になってウォーと呼びかけてみたり、集団に参加する気持が低い時に「見ている

場所」になるなど、子どもの心理的世界を思うまま表現し、ふるまえる場所として、多く使われている。行為の可能への「高さ」の効用は、心理劇(4)における「舞台」の意味で実証されている。

②は、高さの異なる数個の木製の台であるが、その組み合わせや置き方によって、いろいろな活動を展開することができる。山型や谷型の階段のように並べて、①と同様の使い方もできる。室内に点在させておくと、お店やさんができたり、家や、活動の拠点になったりして、行為を通してのグループづくりが役だつことが多い。

△体験をゆたかにする行為▽

行為することによって、子どもの生活体験はゆたかなものになる。ゆたかな生活体験は、子どもが、人、ものとの関係から成る、さまざまな生活場面（活動場面）において、どのような役割のはたし方をするかによって左右される。身体的条件にとらわれて、行為の可能性を固定的にみていると、役割のはたし方を、固定的にとらえる傾向にある。たとえば、普通児の集団の中に、からだの不自由な子どもがいると、欠陥のある子どもとして、

「同情」したり、「保護」したりする考え方から、集団活動において、参加できる場面とできない場面とが決まってしまうがちである。

「このゲームはとても無理だから見ていきましょう」とか、「他の役割はできないけれど、この役割だったらできるから」と、自分も他も認めた中での参加のしかたがどうしても多くなる。

そのような集団体験の中からは、子どもの行為の可能性を阻み、集団の中で、「普通児」と「肢体不自由児」を区別する考え方が育つて、それがそのまま、社会関係にもちこまれるおそれがある。普通児とひとしく、集団活動に参加しながら、集団の発展を促進するのに必要な役割が、その活動に用意されていることが、基本的条件である。

その基本的条件がみたされた中で、肢体不自由児といわれる子どもたちにとって、どのような体験がつけられることが、のぞましいかという点、

・手をつかったり、足をつかったり、自分からだをつかっていることは楽しいことだという体験がたくさんあること。

・集団活動の中に、相互に働きかけることができて、しかも交代することが可能な役割が同時に用意されていること。たとえば

ば、「演じる人」と「みる人」がいて、演じることができないから、「みる人」になるというのではなく、「みる人」の役割があることによって、「演じる人」の活動がたかまり、そのことが全体の集団活動を発展させる。

そのような役割のとり方をしたのち、役割が交代してみる人が演じる人になる。その場合、「演じる人」がどのような演じかたをしても、それをよいものとしてうけいれ、位置づけることのできるような、内容と指導のくふうが必要である。

・かなり課題がはっきりしたあそびにおいても、分化してとらえられる役割が、多く用意されていることがのぞましい。たとえば、「汽車ごっこ」の中に、汽車を動かす人、のる人、トンネルになる人、ふみきり番になる人、信号係、線路をなおす人、駅長さん、お弁当をつくる人、売る人など、どの子どもも、その子どものもつ特殊な条件や、集団における位置を生かして、活動に参加している。

そしてどのような行為も、その活動の発展に必要なひとつの役割として位置づけられていて、責任をもってその役割をはたすことの中で、ゆたかな生活経験が自分のものになるのである。

△変革を促進する行為△

体験された行為は、場面の変化や、方向を洞察することによって、新しい行為への可能性を生み出す。行為は、子ども自身の変革が実現されていく過程である。集団活動の中で、このことが大切にされ、実践されていくことが、子どもたち、ひいては社会における変革につながるものと考えられる。

・ 集団活動に用意された役割には、活動の発展を促進する役割、活動内容を豊富にする役割など、その役割が集団活動にはたす機能が種々ある。今、積木で高いビルディングをつくっている活動が行なわれているとする。身体的条件などによって、積木を高く積む活動には、促進する役割で参加することができにくい子どもでも、そのビルディングの窓々につり下げるさまざまな電気を色紙やクレヨンでつくる場面では、主体的に参加することができる。

このように、場面の変化に即応した役割がとれて、異なる参加体験ができることが、集団におけるその子どもの地位が固定することを防ぐであろう。

・ 活動量の多いゲームなどで、勝負を競うような場合、二、三

人ずつのチームをつくり、チームとチームのぶつかりあいのような活動にすると、参加の可能性はたかまる。たとえば、「おにごっこ」のようなゲームを集団で展開しようとする場合、三人のチームを数組つくり、その中の一人の背中に、ハンカチをはきこみ（あるいは、はちまきをして）それがとられたら負け、多くとった組が勝ち、のようなルールを定める。特殊な身体的条件をもつ子ども、アメーバのような動きをするチームの中にいて、自分の責任をまもりながら、チームの責任をもはたす。チームにおける活動で変革の体験はなされやすい場合がある。

「肢体不自由児」といわれる子どもたちの発達を促進する可能性を育てるために、普通児とひとしく、ともに保育される機会の、少しでも多くなることを、強くのぞむものである。

注(1) 「適応と変革」松村康平・板垣葉子共著より

(2) 「適応と変革」松村康平・板垣葉子共著より

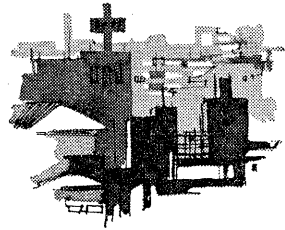
(3) 日本肢体不自由児協会通園センターでは、はじめにの

べた「三つの円の交差領域に対応する集団活動の実践活動」と技法の研究が、未熟ながらすすめられている。

(4) 「心理劇」松村康平著参照。

(日本肢体不自由児協会中央療育相談部)

ユートピア



本田 和子

アメリカに留学している若い児童学研究者、江波諄子さんから、こんなお便りをいただきました。

「教育のみならず、この国にいると人類は退廃の時期に来たのかしらと大げさに考えてしまいます。何世紀の間とても生産的できて、しかもその生産性を人間が支配してきましたが、いつの間にか機械が速くまわりすぎ、人間がその後を追っているようになってしまったのではなにかと思えてしまうのです。

幾人かの優秀な人はその現状に気づき警告しますが、どうしてよいかは誰にもわからない、みんながみんなもがいている、この富んだ社会の中で…。

全てがコンピューター化され、便利すぎるようになりましたら人間は一体どうなるのでしょうか。でも実際、社会は急速にそうなるように近づいているのです。

私は二十一世紀の教育を考えなくてはならない人間のひとりですが、この点では頑固なおじいちゃまが古いしきたりを一人で守っている姿を自分の中にみます。

一体人間はどこまで物（操作できるという意味の）になり得るでしょうか。

文明の進歩は人間を物へ、物質へと押しこめているようです。何百年もの間かかっていたひとつの時代から次の時代への変化が、今や数年あるいは二、三年の間にやってくるように変化の加速度が加わっているのですから。

アメリカの幼児教育は一体どうなっているのでしょうか。子どもたちは研究という名の下で細かく細かくお料理されています。おとなたちは自分のお料理に満足しておりますが、一体子どもはよくなっているのでしょうか。

私はもう旧式なのでしょうか。でもナーセリースクールの子どもたちと触れ合

って、子どもたちを愛し気持の通じ合う、とても幸せで人間的な経験を持つていると思うのですが……。

今や、子どもをほんの一面からこまごまみる人は増えましたが、姿全体をみられる人は本当に少なくなっているように思えてしまいます。

アメリカという国は大きすぎてどうしようもない国です。みんながいっしょけんめい動いているのですが……。

日本の教育はアメリカの後を追っているのでしょうか。アメリカのように進んでも、同じにならないように願っておりません。教育の場はある意味で病んでいるのです。こんなにもきれいな青い空と芝生と立派な建物があるのに……」

子どもを「ひとりの人間」としてより生き生きと生活させることを願って、そのために学び得る多くのものを吸収しよ

うと、海を渡っていった若い学徒は、アメリカのこんな姿に感慨ひとしおだったでしょう。

子どもの生活はバラバラにされ、その細かな部分が詳細に研究される、厳密な科学的手続きを経て、使い得る限りの器械を駆使して。あたかも細胞の一片を電子顕微鏡でのぞくかのよう。

そして、それらの研究成果が山積されていく時、もっと悲しくもつと恐ろしいことが起こってくるのです。即ち、それらの詳細に研究された細片をよせ集め、はり合わせるならば、それで教育が進歩するかのような錯覚に、教育界が陥ってしまうのです。目の前に生きて動いているいきいきした子どもの生活を忘れて。

ましてや教育界全体が、子どもたちの生活全体と取り組むことを止めて、それを細かな片に分解することを始めるとしたら、子どもの不幸はここにきわま

る、とすらいつてよいのではないでしょうか。

ゴッホの絵を仔細に検討し分析して、その使われた絵の具の質や割り合いが、あるいは絵筆が画布の上を何回往き来したかなどが、具体的にとらえられたとします。ところで、それらが判れば、すべての人がゴッホと同じ作品を描き得るとは、誰も考えないことでしょう。ゴッホというかけがえのない個性が、南フランスのあの風物と出会い、めくるめく陽光と茂り合う樹々とふれ合って激しく燃焼した時、はじめてこれらの作品が生まれ出たのですから。

人の教育は芸術ではないでしょうか。ましてや、あのいきいきしさと光に溢れた幼児たちと、保育者という一つの個性が出会う幼児教育は、まさに芸術そのものではないでしょうか。

人

フランシス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界(二)

秋山 達子



前号に引きつづいてフランシス・ウィックス夫人の書かれた『幼年期の内的世界』から、特に幼児の教育に関係のある部分をご紹介しますと思います。ウィックス夫人はC・G・ユングについて心理学を学びましたが、この本の中の一章で、子どもたちのタイプについてユングの理論に彼女の経験を加えて発表しています。タイプの問題は非常に難かしく、一見あるタイプに属しているように見えても、よく観察すると必ずしもそうではない時があります。

ここにあげる例はウィックス夫人が彼女

自身で扱った事例についてユングとともによく検討した上で書かれたものですので、ユングの複雑なタイプ論が事例とともによく理解できます。そして子どもたちのタイプを知るとは、診断的な意味よりも、一人一人の子どもをよく知るために重要な問題と思います。

ユングは長い分析の経験から彼の患者がそれぞれ個人的な特徴は持つていて、大別すれば二つのタイプのどちらかに属することを発見しました。それは内向性と外向性の二種類で、ある人の興味がどちらの方向

に向いているかによって区別されるものです。外向性の場合はその人の意識的な興味が外の世界にある対象に向けられていますし、その反対に内向性の場合には意識的な興味が外界の対象から離れて彼自身の心理的な過程、より主観的な世界に向かっています。ウィックス夫人はいろいろな事例を扱っているうちにこのような区別が大きな意味を持つていることに気がつきました。

内向性と外向性は一般的な人間の態度に基礎を置くものですが、もちろん誰でもこの両方の態度を多かれ少なかれ持つてい

ものなので、はっきり区別するわけにはいきませんが、しかし多くの場合どちらかの傾向を比較的強く持っているものです。また、子どもたちは両親の影響下にあるので、しばしば両親の希望や意思または無意識的な影響を反映して、彼ら自身の本当のタイプを外に示していないこともあります。よく観察すれば、本当はどのタイプに属しているかを示す特徴的な反応を見出すことができます。

例えば、はじめて幼稚園や小学校に登校する時に、子どもたちはさまざまの異なる態度を示します。ある子どもは親しげで熱心で新しい環境に大きな興味を示します。彼らにとってはあらゆる対象、先生や他の生徒たちまでも好奇心の的であり、外界に接することにはなんの恐れもなく、すすんでこれをとらえて調べてみようとする熱意に燃えています。これらが外向的な性格の子どもたちの特徴的な反応です。

しかしなかにはこれらの新しい環境におびえて、引き下がろうとする子どももいま

す。外界は彼にとつて絶えざる注意を必要とするところのようであり、不愛想で疑い深く他人と共感を持つことをはねのけようとしているように見えます。彼はあなたに向かつて笑ってみせるかもしれませんが、その笑いは何か遠い感じで、高いお城の窓から遠い景色を眺めてでもいるような、どこか近より難い感じを与えます。このような子どもたちが内向的な性格の特徴を示しているのです。彼らは彼ら自身の内的な世界の中に住んでいて、対象との間に安全な距離を置くか、またはそれを受け入れるとしても一度彼ら自身の心の奥にまで運びこんで、主観的な価値づけをしてからはじめて反応を示すのです。

もちろん子どもたちのタイプはそう簡単にはきめつけるわけにはいきません。引っ込み思案に見える子どもでも、本当は外向的であるのに母親の過保護に甘えて、赤ちゃんでぶっているだけなのかもしれません。または両親の厳しいしつけや兄たちに対する劣等感から小さくなっているのかもしれない

せん。あるいは本当は内向的な子どもなのに両親によって社交性を教え込まれて一見外向的に見えるだけかもしれません。

それでもちょっとしたことから子どもたちの本当のタイプを知ることができます。例えば工作の時間に母の日のプレゼントを作ることになるとします。そして思うようにできなくていらだっているので先生がいくら手伝ってあげたとします。ある子どもは作品が上手に仕上がったので喜んで家に持って帰りますが、またある子どもは先生が手伝ったので、それはもう自分の作品ではないといって不満です。外向的な子どもにとってはでき上がった作品が問題になるのですが、内向的な子どもにとっては自分で困難を克服して作るという気持ちが大変なので、この内的な価値こそ母親に贈りたいと思っているものであって、作品自体はどうでもよいのです。

このように先生がたとえどの子どもにも同じことをしたとしても、その反応は決して同じではないのです。外向的な子どもは

環境の変化にも容易に適應しますし、集団行動にもよく参加し、反応も素早く、他人の考えを入れ、友だちも多く、外界の状況を統制したり、指示を与えたりすることができず。皆の意見と大体歩調を合わせ、機智に富み積極的です。これに反して内向的な子どもは万事ゆっくりと行動し、ものごとをまず自分の中にとり入れてそれとよく親しんでからでないと反応を示しません。

このような子どもの知的な能力を計るには注意が必要です。例えば知能検査の場合でも、これに要する時間の問題は、むしろ当人の知的能力よりもタイプの差を示すものかもしれません。このために内向的な子どもは年少期にはよく愚鈍な印象を与えます。また問題に反応する前にそれを自分の中に引き入れて熟考するので、意固地な性格に見えることもあります。現代はどちらかというと外向的な時代ですので、内向的な子どもたちの本当の価値が見失われてしまふ危険があります。これらのタイプの違いは出生や環境によるものではなく、生来

その人に備わっているものようです。同じように育った二人の子どもの間にも大きな差異が見られますし、また教育のある人にもない人にも、そして裕福な人々の間にも貧しい人々の間にも見られます。

子どもたちに接する時には、このようなタイプの違いについてよく注意することは非常に重要なことですし、また自分自身のタイプについても洞察を持って、自分の好みやタイプから子どもたちを誤らして判断することのないようにしなければなりません。例えば学年によってまた先生によって同じ子どもの評価が著しく異なることがあります。ある学年で一人の子どもが非常に興味深い考えを持ち大きな能力と将来性を持っていると言われ、次の学年で先生が変わったら、彼は空想的で実際的ではなくものごとの観察に不正確であるといわれました。また反対にある子どもは想像力や独創性に欠けると評価されていましたが、先生が変わると非常に正確でよく反応し注意深いよい生徒であるといわれるよ

うになりました。これらの評価の違いはもちろん子どもへのゆえではなく先生のタイプの違いによるものです。そして一番恐ろしいことは、愛とか子どものためにという美名のもとに、先生や両親が子どものタイプを無視して彼ら自身の夢や希望を押しつけることです。次にあげるような例は世間ではそれほど珍しいものではありません。

第一の例では、父親が本来は内向的な人であったのに家族の要請や経済的な事情から、内向的な人には絶対に必要な一人でいる静かな時間を、次第に奪われてしまったことから問題が起きました。

父親は自分自身の喜びをあきらめて子どもの上にそれを夢みるようになりました。彼はかつて若い時に小さな大学で過ごした静かで幸福だった日々を思い出しながら子どもが生まれると、彼の息子が同じような哲学的な思索に囲まれた古典的な生活ができるようにと計画しました。ところが不幸なことこの子どもは父親とは反対に外向的な性格で、より一般的な科学的実験など

を好みました。息子はもちろん技術的なものを学びましたが、父親は技術面に発達した設備のよい大きな学校を嫌って、古典が尊重されるような小さな学校を無理強いました。息子は反抗してみたものの結局折れて父親のすすめる学校に入りましたが、成績は惨憺たるもので、家庭教師をつけられたりしながらやっと卒業できたような次第でした。

その後で息子は自分の意見の正しさを示すために、もう一度違う学校に入り直して技術的なことを学び、優秀な成績で卒業はしましたが、父親への反抗や最初の大学での苦い経験は、明るく健康なこの青年の性格をすっかり暗くねじまげてしまつて意固地な難しい性格に変えてしまつたのです。

また別の例は内向的な感情型の少女の話ですが、彼女の母親は、アメリカの成功した職業夫人によく見られる自分の職業と自分自身を同一視した結果、非常に積極的で外向的な性格を持っていました。結婚する前は職場でよい地位を持っていて、自分自

身でもまた周囲の人々からもよく役に立つことができる人と思われて満足していました。そして外向性の人によくあるように世間の常識をよく受け入れて行動する性格でしたので、女性の幸福は安定した家庭と子どもを育てることにあると考えて、ちよつとした財産を持つ商売人と結婚し、子どもが生まれると同時に職場を退いて家庭の主婦におさまりました。そしてやはり世間の常識に従つてよい母親になろうと努め、子どものために生きようと決心しました。

彼女の最初の子どもであるこの少女は、生まれながら深い感情を持った弱々しい、しかし、あまり頭の鋭くない子どもでしたが、母親はこの少女のために学問的に高い水準の学校を選びました。

最初はそれですべてよくいっていたのですが、年長になるにつれて母親の希望はますます大きくなり、彼女は学校のいろいろな組織に参加するようにすすめられ、学校劇に出演させられ、多くの派手な友だちを持たせられるようになりました。その間

にも勉強はどんどん進んで難しくなり、特に母親の要求で、社会的な役割も押しつけられている少女の能力では、とても追いつけないところまできました。そこで母親は彼女といつしよに勉強を繰り返すように努めました。これは少女の劣等感を増してただ心理的な混乱を引き起こす結果となつただけでした。

しかし落第点に近い成績も母親にとつては大きな挑戦としか受けとれず、「私がついているからには、この子に失敗はさせられない」という確信を強めただけでした。そして少女が完全に追いつめられて、心理的にまいってしまった時に母親は涙ながらに言ったのです。「これほどこの子を愛し、すべてを捧げつくしてきたのに、どうしてこんなことが私に起こつたのであろう」

この最後の言葉は母親の無意識の考えをあらわすもので、本来は「どうして彼女がこんなになつたのであろう」というかわりに「どうして私に起こつたのであろう」といっているのです。愛と自己犠牲の仮面は

落ちて、そこには利己的な母親自身の野心的な姿があるのみです。幸いなことに少女の無意識が彼女を助けて、この時神経症の症状を訴えはじめました。そして病気であるということがこの誇り高い母親に口実を与えて、少女はやつと完全な環境の変化と、より多い戸外での生活が与えられるようになりしました。しかし、この少女が再び自信をとり戻して、自分自身の生活を始めるまでには長い年月がかかったのです。

ここにあげたものは極端な例ですが、多くの場合両親は子どもの幸福を願いながら、現実には理由のわからない行き違いを感ずることがあります。しかし無意識的な欲望よりも、真の愛と勇気の方が強ければ、両親はやがて子どもを理解するようになり、彼自身の道をすすむように助けることができますのです。そしてただ健康な問題の少ない子どもたちばかりでなく、肉体的や知能的に欠陥を持ったり負い目を背負った子どもたちでさえも、両親や先生たちの理解と指導によって、その子どもなりのタ

イブと能力に従って本当に幸福な生涯を送ることができるのです。

ユングのタイプ論は外向性、内向性の他にも、思考、感情、直観、感覚という四つの機能の区別をあげていますが、ウィックスマ夫人はこれらについても数例をあげて説明してきますので、ここにその幾つかをご紹介しようと思います。

例えば思考型についてですが、学校で優秀な成績をあげるのは通常思考型の子供です。学校は知的なことを習うところですし、思考は現実を知的に解釈する機能です。しかし本当の思考はゆっくりと発達するものであり、記憶力が重要視される年少の学年では思考型の子供も、特に内向的な思考型の子供もあまり認められません。

ある七歳になる少年が科学博物館に行つて長いこと世紀以前の怪獣の骨の前に立っていました。やがて「何千年も前の、人類が生まれてくるまで、その前にはこんなものがいたんだな。そして何千年も後には人間なんかいないで何か違うものがあるん

だろうな。僕たちがつまらないことをしゃべっている間にも神さまは笑っていることだろうな」と夢見るような口調でつぶやきました。この子どもは学校では数の組合せが覚えられなかったり、早く返事ができないので問題になっていたのでありますが、彼の思考力が真価をあらわすのはもっと年長になってからのことでしょう。

また知的な興味をあまり推し進めると子どもの無意識内に抑圧された感情面が爆発して退行的で幼児的な動作をしたり、気ままになったりすることがあります。非常に利発な少女がいましたが、両親も先生もあらゆる機会に彼女の知的な面を開発しようとしていました。そして少女自身も学ぶことが最も好きなのように見えたのですが、次第に加虐的な傾向を持ちはじめ、指をしゃぶったり、爪をかんだりするようになりました。少女は肉体的には健康であったし、母親にどうして彼女がそんなに神経質になったのか理解できませんでしたが、それは彼女自身の野心的な意思が思考面にだけ集中し

たので、他の心理的な機能を抑圧していた結果であったのです。

感情型の子どもは家庭で最もよく能力を発揮します。学校でも、もし思考面での劣等感に邪魔されることがなければよく適応して友だちとの交遊などがじょうずです。

ある九歳になる少女は、学校ではあまりに愚かなので先生を悲しませていました。家庭ではよく気のつく利発な子として母親の誇りでした。またある少女は愛情深い性格でしたが、母親からいつも「私が好きならもつとよい成績をとってみせて下さい」としかられてばかりいたために、感情面のはけ口がなくなつて、悪夢を見たり寝汗をかいたりするようになりました。

最も判断するのに難しいタイプは直観型の子どもです。外向的な直観型の子どもはいろいろなアイデアを持っていますが、最後までやりとげることはあまりなく、彼にとつては結果より可能性の方が興味があるのです。そして先生が難しい顔をしている時に、呑気な冗談をいってふんい気を柔げ

たり、本を読む時も調子よく、難しい言葉は巧みにはぶいたりします。また内向的な直観型の子どもは、内的な幻想に引き込まれやすく、書き取りの時間に一つの言葉が内的な連想を次々と生んで先生の次の言葉を聞いていません。このような子どもは幻想の世界に住んでいます。それは現実逃避のための幻想ではありません。

ある少女は注意が散漫であるといわれていましたが、よく観察していると、時々目の中に楽しそうな輝きが見られました。そこで後から「さつき数学の時間にどんなすばらしいことを見たの」と聞いてみたら、彼女はある言葉から連想した美しい光景について話してくれました。このような時にそんな幻想はばかばかしいと無視してしまうことは危険です。まずそれを受け入れてあげてから、もつと現実的なことにも気をつけるように注意するべきです。

感覚型の子どもは現実そのものの感覚の中に生きていて、よりよい感覚を与えるものを求めますが、しかしこのような子ども

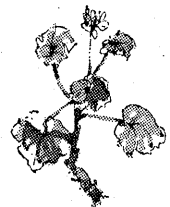
には都会のあまりにも激しい刺激的な感覚は強すぎて毒になることがあります。

子どもたちは一般に、原始的な民族のようが発達した直観と感覚を持っています。特に内向的な感覚型の子どもは、もの形の形の中に不思議なものを見出します。ある時そよ風にゆらいでいる机の上の花を見て「変な小男が手招きをしているから、こわい」と言った子どもがありました。このような子どもは自分の感覚を理解しても、ええなために、しばしば孤立して劣等感を持ちます。もし私たちがこのようなことはその子どもが変なことを言っているわけではなく、ただある種の性格的なタイプからそのように感ずるのだということを理解して接すれば、子どもたちは安心して心の平和を保つことができるのです。タイプの問題は決して簡単ではありませんが、特に子どもに接する仕事にたずさわる人々にはよく理解していただきたいと思えます。

このようにウィックス夫人はこの章を結んでいきます。

ヨーロッパの旅(十)

平井信義



いよいよパリを飛び立って、マールブルクに行く。マールブルクは、西ドイツの大学都市の中で、私が最も好きな町である。

町の北側には高い丘があり、その上にお城がそびえている。お城の裾に町がひろがっており、ライン川を隔てて、お城と対峙して再び丘となる。ライン川は、二つの丘の間をうねうねと流れているのであった。

思い出は、十六年前にさかのぼる。大学病院精神科の児童部を訪れた日のことである。ケルンから汽車で二時間余り南に下るとこのマールブルクに着く。古い形のコンバートメントの客車にのり、ケルンを立ったのであるが、その古ぼけた列車は、木製の座席であり、駅につくたびに、一つの客車にある六つか七つの入口があけられ、発車間際になると、外から車掌がその扉をばたあんと閉めるその音が、今でも耳の底に残っている。この音は、故郷を離れて郷愁にかられている者にとっては、無惨にも脳

に割り込んでくるような音であった。私は、その音をきいて、幾度か飛び上がる思いがした。

夕方マールブルクについた私は、うねうねと続き、いくつかの坂道をのぼったりおりたりする細いパールフス通りを歩いていた。パールフスというのは裸足という意味であるから、訳せば裸足通りとも呼ぶべきであろう。石畳が敷かれ、馬車が通るとがらがらと大きな音がわき起こる。この通りが、マールブルクのメインストリートであった。

地図を頼りに、先ず、カルシュユさんの家に行く。カルシュユさん夫妻は、日本に二〇年もおられたという方で、私に会うのを楽しみにしているという手紙をいただいていた、日本語も通ずるという気安さが、初めてのこの町での私の足どりを軽くした。二〇分も歩いた頃、番地がカルシュユさんの家のナンバーに近くなり、一軒一軒のナンバーをのぞき込むようにして歩くと、右側の石段を

何段か上がった三階建ての家に、カルシュさんの家のナンバーを見つけた。

ブザーを鳴らす。待っていましたとばかり扉があいて、カルシュさんのまろいこやかな顔。そして、たくさんの白髪をまじえた夫人の顔がカルシュさんの肩から私を見下ろしている。握手、また握手。部屋に入った私は、早速に日本の話について、あれこれときかれる。昭和三十年のことであり、日本もまだ復興というには早い状態にある頃であったが、喰い入るように私の話に耳を傾けたカルシュさんは、「日本はよい国です。もう一度いきたい。だが、年をとってしまった」といって、首を振った。

「日本へいくチャンスがあるでしょう？」とたずねると、

「チャンスがあっても、二人のからだが許さないでしょう」という答えであった。「しかし、日本は再び早く復興する。それが見たい」などもいわれた。二時間ほどでカルシュさんの家を辞し、カルシュさんが予約しておいて下さったパンションにいった。そこで一〇日間を過ごしたのであるが、実はそれきりカルシュさんとはお会いする機会を失ってしまった。マールブルクを去る時に立ち寄ったのであるが、夫妻とも不在であった。その後数年して、風の頼りにきいたところでは、夫妻とも故人になられたということであった。

その翌日の夜、私の部屋に、名も知らぬ男から電話がかかってきたのも忘れられない思い出である。

「あなたは、日本人か?」「然り」「ゴができるか?」「ゴ?」

「そうだ、碁だ」「碁ならできる」「あなたと碁をやりたいが、今晚部屋をたずねてもよいか」「今夜は、時間がある」「それは、八時半にいくが、よいか?」「待っている」

ちょうど約束した時間に、一人の男が私の部屋の戸をノックした。戸をあけてみると、若い男がかしこまったように立っていて、手には、二つ折りにした板と、紙の小箱を二つたずさえていた。

「私はこの大学の、工学部で勉強している学生ですが、数年前から碁を自習しました。日本人と一度試合をしたいと思っていたが、私にあなたのことを知らせてくれる人があったので、失礼とは思ったが楽しみにやってきました」と、彼はいった。この青年を目の前にして、私は実に妙な気持になったのをおぼえている。

異国における全く突然のできごとであった。碁を打つのは、うれいような気がする。しかし、取り立ててうれいとも思えない。すでに囲碁から離れて数年になり、余り自信はないが、いったい彼がどのくらいの力があるのだろうか、それもわからない。

しかし、その青年は遠慮なく私の前に板を差し出した。自分で

黒い線を引いたのであろう、ところどころゆがみを持った線が、碁盤の目を作っていた。二つの箱のふたがあげられて、みると、碁石はすべて白と黒のボタンであった。「いいアイディアだ」と私が言うと、彼はうれしそうに微笑した。そして、私に、白を持つてという。承諾した。

しかし、打ち始めてみると、初めは優勢であった私の碁も、最後のはげしい攻撃に合って、右の隅が大きく死に、第一回戦は惨敗に終わった。その時のうれしそうな青年の顔は、今でも忘れられない。二番碁となり、私が黒をもった。しかし、これも私の敗北に終わってしまった。すでに十一時を過ぎていたので、二番でやめることにしたが、彼はまことに意気揚々として私の部屋を出ていった。「日本人に勝った！」という誇りは、非常に高かったと思う。それきり彼からは連絡がなかったが、そして、その後十五年。彼のことは忘れがちであったが、こうしてマールブルクの地を踏んでみると、思い出されることである。名前も忘れてしまった。しかし、どこかでテクニシャンとして活躍しているであろう。碁の腕前はその後どのようなようになっているであろうか。あのようすでは、恐らく腕前をあげていることであろう。

マールブルクは、今回で三回目になる。前回は、家内と同伴で

あった。ぜひこの町のお城や町並を家内にも楽しんでもらいたかった。僅か三日の滞在であったが、お城にのぼり、町を見おろし、あるいはラーン川のほとりを散策したりした。とくに、裸足通りに面して十二世紀の建物が建ち並び、中央の市場と呼ばれるわずかばかりの広場には、朝市が立ち、早くから買物客に呼びかける大きな声が響いたりした。

そこには、市役所があったが、「太陽」という酒場の方が、私には親しみがあつた。入口の戸口の上に、金具で作られ金色をした太陽の看板がさげてあり、その太陽には笑顔が刻まれていた。それが何を意味するかよく知らなかったが、やはり十二、三世紀頃の建物で、二階にあがると、その床はきしんだりした。このワインは、ムードも手伝つてか、あるいはつい高い値段のものを奮発するためか、殊更に美味であった。酔うほどに楽しくなる酒場であった。

今度も、二度ほどこの酒場を訪れた。一回は、夕飯後に、ここに留学しているHさんとその男友だちのドイツ人学生と、ベルギーからかけつけてくれたYさん、それに私とともにヨーロッパの旅を続けているI氏との五人であった。ドイツ人学生は神学の専攻ということであったが、彫りの深い顔にふさふさと生やした口ひげとあごひげとは、その重々しい話し振りと相まって、なかなか

かの威厳を備えていた。先ず、私が二〇マルクをこえるライン酒を注文する。ドイツの葡萄酒には、ライン酒とモーゼル酒の二つの系統があり、それは好みによるが、私にはライン酒が合う。いずれにしても、一本が二千円に該当するからよい酒にちがいない。

小さな木の桶に水を入れ、その中にワインのビンがつけてある。ボーイがそれを取り上げ、白い布で水を拭き取ると、おもむろに栓抜きでコルクの栓を引き抜くのである。ボンという音とともに栓が抜けると、ちょっとやうやくしく、私のグラスに少量のワインを注ぐ。私は、グラスを取り上げて、そのワインを舌の上でころがし、味をためす。「これはうまい」とか、「すばらしい！」などともったいぶって言うと、私の顔をのぞき込むようにしていたボーイが、うなづくようにしてから、各人のグラスへなみなみとワインを注いでまわるのである。

そこで、いっせいにグラスを取り上げる。そして、右の人に左の人に前の人にといいた具合に、おのおのが目と目と合わせ、「プロースト！」という。乾盃という意味である。そして、一口飲むと、再びそれぞれの人々が目と目とを合わせて、グラスを机の上におく。目と目とを合わせる——これは、まさにドイツふうというべきであろう。そのような時、目を細めるドイツ人もあるが、にらむように見詰めるドイツ人もある。グラスをともに口

にするたびに、目と目とを合わせる人もいるが、自分勝手にグラスにワインを注いでは、飲み乾していく人もある。あとは、その人々の好みに従えばよい。

そのワイン酒も実においしかった。酔いがまわるにつれて、話題がはずみ、笑いが次々と起こる。ふと気がつくとき、私どものまわりのテーブルは、ドイツ人でいっぱいになっていた。多くが、夫婦揃ってきている。太った亭主にやせた妻君もいる。年をとった夫婦もいれば、若い夫婦もいる。子どもを八時までにねかせつけてから、このように夫婦でもって酒場に飲みに行くのが、彼らの習慣になっている。子どもたちから解放され、アルコールもまわってくると、すっかり陽気になる。嬌声がさかんにあがる。何組かの夫婦で来ているテーブルでは、お互いに肩と肩を組み合せてからだをゆすりながら民謡を合唱している。ますます賑やかになると、私どもの笑い声などはかき消されてしまうほどであった。

わが国では、夫婦で飲みに行くなどの機会はまことに少なからう。妻君の方には、酔う楽しみを知らない人が多い。酔うことは、不真面目な行爲と思われている。二人で酒場に行っても、亭主だけがぼそぼそと飲むことになってしまふであろう。それではつまらないから、結局は、亭主一人で来る酒場になってしまふ。そこには、女の給仕がいて、その人を相手に飲むということにな

る。キャバレーにしても、同じ仕組みになっている。このドイツには、給仕といえよそのほとんどが男性である。飲んでいる客の相手をする女性には不要に近い。いても、酒や料理を運ぶだけのサービスである。とにかく、彼らは夫婦で楽しむ習慣が確立しているのである。全く、子どもの姿はそこにはない。

その間に、子どもたちはどうしているのだろうか？ すでに熟睡したからだをベットの横たえている子どももあろうが、寝そびれて、青い目をあけたり閉じたりしている子どももある。パパとママとはどこへいったのだろう——と不安に思っている子どももある。あるいは起き出して、玩具箱から玩具を引っ張り出して、それらが睡眠障害の原因になっているという。

石の家に住んでいるから、火災の心配は少ない。地震もない。その点でも、親たちは安心して子ども一人を家において出かけることになっているのである。わが国のように、火災が多く、地震の心配のある国では、どうしても夫婦のうちのいずれかが子どものそばにいななければならないから、家をあけることができない。当然、母親が家に残るといことになる。幼い子どもを家に残して夫婦ででかけるなどは、耐震耐火の建物ができた日のことであろう。私は、酔いがまわるほどに、周囲のドイツ人が賑やかに飲

んだり歌ったりしているのを眺めながら、そのようなことを思ったりした。

われわれのテーブルの最初のビンが空になると、神学生が同じ種類のワインを注文した。彼がおごつてくれるというのである。同じようにしてワインのビンが運ばれる。再び「ブロースト！」目と目を合わせる。一と口飲み、また目と目を合わせる。

恐らく、私の頬は赤くなり、目は少しばかりとろんとしてきていたかも知れない。くつろいだ気持になると、旅の疲れがにじみ出てくる。このままここへ寝込んでしまいたいような気分になる。まだ、ヨーロッパの旅は、半分になっていない。スイスへ、イタリーへ、そして、最大の目標であるオーストラリアへ——まだまだ旅は長い。

私は、この前の時にも、旅の半ば頃になると、日本に帰りたくなる。カレンダーの日付けを消して、帰りつくまでの日を数えるようになる。そのあげく、どうしてヨーロッパなどに来てしまったのだろう——などと思ったりもする。帰国すれば、すぐに、旅に出たくなるはずなのに——。いわば、郷愁であった。郷愁は、酔いがまわるほどに強くなる。周囲に三人の日本人がいて、気安いふんい気があるにもかかわらず、私の郷愁は強くなっていた。

十一時を過ぎた頃、ぶらぶらと裸足通りを戻りながら、ホテル

に着くと、早速部屋の鍵を受け取り、まっすぐに自分の部屋へとたどり着いた。通りとは反対の、裏山に面したその部屋は、森閑としていた。まだ九月の半ばだというのに、何か寒々とした感じさえした。そのような時、私は、カバンの中から家族の写真を取り出す。そして、机の上にそれを立てるのであった。それをじつとみていると、家族の誰かが、私に向かって笑いかけてくれるような感じがする。それを見ながら、洋服からゆかたに着替え、「おやすみ」といい、明りを消し、ベッドの中にもぐり込む。そこには、明朝までの熟睡が待っているのである。

いよいよ明日は、大学の精神科を訪れる。しかし、マールブルクを訪問した目的の一つであるウェーバーさんがいなかったのは、私を落胆させた。ウェーバーさんは、女医さんである。十六年前にこの地に来た時もフロイライン(未婚の女性)であったが、今日もなお、フロイラインであった。目下、講師資格を取得する論文を書くために、スイスの山の中に引き籠っているという。

十六年前にここへ来て、はからずもウェーバーさんに会うことができたことは、いくつかの面で開眼する機会となった。すばらしい人間であると思う。次の回には、ウェーバーさんの出会いに ついて話をしよう。

寒 風

風が野を貫いてゆく。どこまでつめたい風なのであろうか。そのゆく所、触るる所、もの皆荒み破られぬはない。つれなやただ一ひら残る梢の枯葉をだに吹き払い振り落さではやまぬという。哀れや落された枯葉の群がまたもやかさかさど吹きまくられてゆく。どこまできびしい追究の風なのであろう。

省みればわが心にもこの寒風はあるまいか。わがゆく所、触るる所、一陣荒涼のつめたさを現じ、苛酷のつれなさを撞にするようのはあるまいか。その目、その唇、風の様に人を貫き、裂き、責め、傷つけることはあるまいか。

風に荒された野は、また来ん春の回復もある。一たび心の寒風に荒んだ心は、また回復のよすがもない。

願わくは寒風をしてひとり野を吹かしめよ。わけても柔かき子供の前に、わが怖しき寒風をして荒まざらしめよ。

倉橋惣三選集第二巻 幼稚園雑草より

お茶の水女子大学

幼児保育現職研究のおしらせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定です。希望の方は左の要領で申込んでください。

一、昭和四十六年四月より、コースごとに週一回、定期的に開催する。

一、お茶の水女子大学の教官が担当する。

一、午後五時—七時とし、コースごとに曜日を定める。

一、定員 各コース約十五名以内

一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者

一、規則書ご希望の方は左のようにお申込み下さい。

東京都文京区大塚二—一—(T112)

お茶の水女子大学家政学部児童学科内 幼児保育研究室内 現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、十五円切手を同封して封書で申込むこと。

電話

(943)一三一五一、内線三三〇、三三六

申込期日 昭和四十六年二月末日まで

幼児の教育 第七十巻 第二号

二月号 © 定価八〇円

昭和四十六年 一月二十五日印刷
昭和四十六年 二月 一日発行

112 東京都文京区大塚二—一—

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二—一—

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一—一—

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三—一—

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします



この事故も防げたかも……………

連日、新聞をにぎわす車による事故。その中で特に人の涙をさそう幼い子らの死亡記事。この写真も昨年東京で起った悲劇の1コマ。私達はいつも思います。

この事故も防げたかも知れないと……………

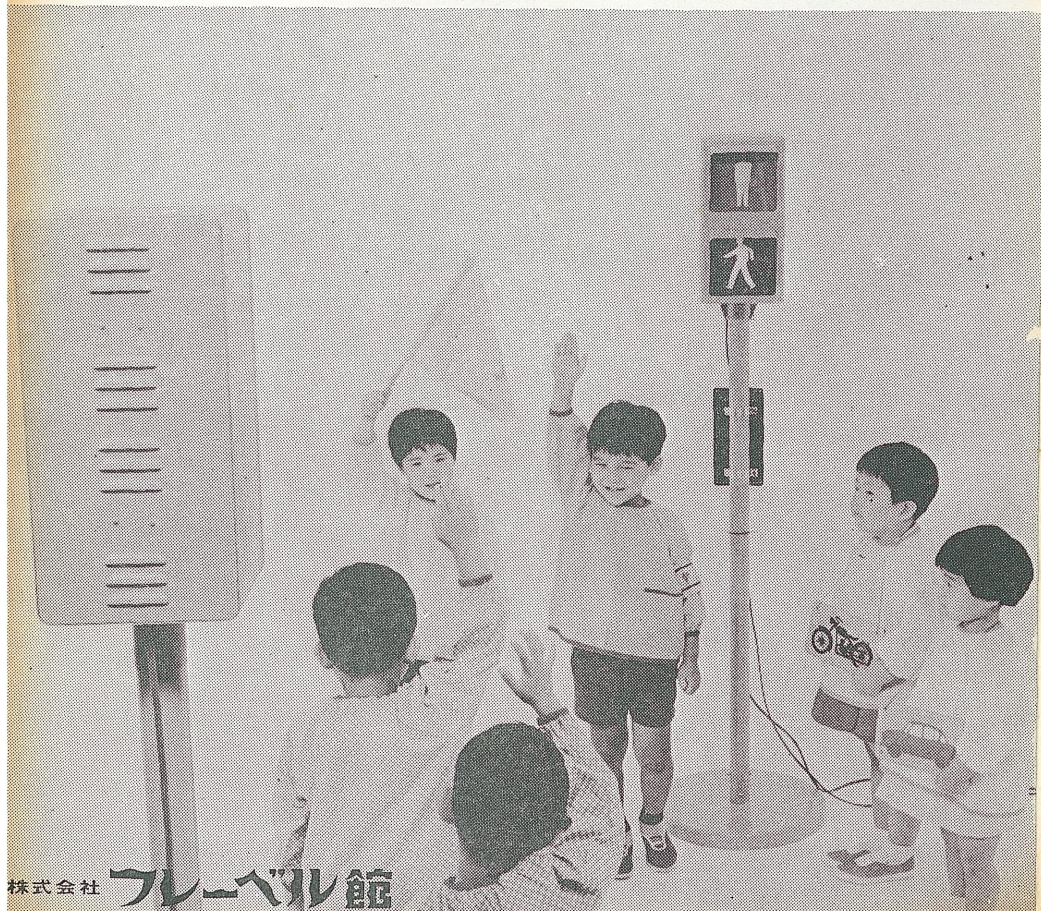
先に教材用の信号機を発売して好評を博したフレール館では、今回はさらに歩行者専用の信号機を発売致しました。

機能的にも、性能的にも町に施設してあるのと同じ。園のカリキュラムやスペースに応じて道路を描き実施訓練してみてください。結構たのしく、自然に交通道徳を身につけられるので有効です。

交通事故のない明るい明日を迎えるために、私達おとなが力を合わせていきましょう。

基本1セット 親子各1台 43,000円
親 1台 27,000円 子 1台 16,000円

歩行者用信号機

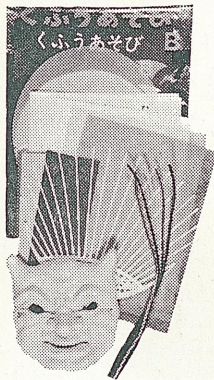


ことしは こんな新製品が登場します。



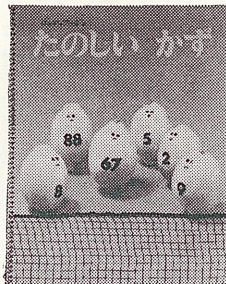
せんのリズム

初歩的な線を楽しく
リズムカルに描くこ
とによって描画や字
を書くことの基礎と
なるものです。



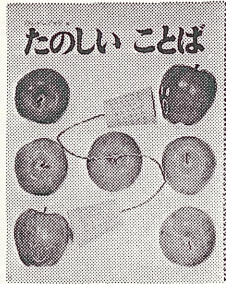
くふうあそび®

素材ばかりを用意し
た作品集です。材質
を生かして自由に楽
しめるよう豪華にセ
ットしてあります。



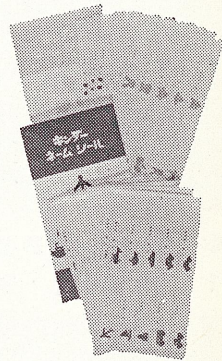
たのしいかず

カレンダー、時計な
ど身近かなものをテ
ーマにした遊びの中
で、数と順序や集積
などの関係を知らせ
ます。



たのしいことば

楽しくパズル遊びや
しりとり遊びを通し
て文字と言葉、言葉
と言葉の関係を、知
らせます。



キンダーネームシール

のりも、水もつけず
に、そのまま台紙か
らはがして使えます。
戸棚や持ち物に貼っ
たり、また模様遊び
にも利用できます。
各シリーズとも10種
類で黄・赤・青・緑
・桃の5色2組の100
枚セットです。組・
名前を書く欄があり
ます。のりもの、ど
うぶつ、さかな・か
い、くだもの・やさ
い、はな・むし、い
ろいろなかたちなど
があります。



たのしいおもいで

子どもたちの園生活時代の作品を破損しない
ようタトウ式にしてあります。A3判が収め
られます。

このほか、いろいろな新学期用品
を取り揃えております。ご用
命は、代理店・支社・支
店・出張所へどうぞ。

新しい感覚と豊かな内容で定評がある

ブルーベル館 **46年度 新学期用品**

発売
ブルーベル館